

# 「ドイツ人の歌」から「ドイツの歌」へ —ドイツ国歌論争—

室井俊通

帝京大学教育学部教育文化学科 〒192-0395 東京都八王子市大塚 359

## 要 約

サッカーの国際試合前のセレモニーに際して代表選手は国歌を歌うべきか、歌わせるべきか、個人の信条にゆだねるべきか？移民国家化している現在のドイツにおいて、答え方によっては国家に関する自己理解の根幹を揺るがせかねない問題となろう。近代のドイツが抱えたネーション形成の困難は、国家の姿を実体化するシンボル、とりわけ国歌の受容のあり方に反映されている。現在のドイツ国歌はハイドンの旋律にホフマン・フォン・ファラースレーベンが作詞した「ドイツの歌」である。本論は、ナショナル・シンボルへの向き合い方は主権者たる人民と国家との関係性を測る指標であるという観点から、19 世紀前半から現在に至るまでのドイツ国民史を「ドイツの歌」の誕生と拒絶、受容の過程として描くものである。

キーワード：ナショナリズム、ドイツ連邦共和国、三月前期、国歌、ホフマン・フォン・ファラースレーベン、「ドイツの歌」、テオドル・ホイース

## はじめに： 大衆政治の時代の文化

ベートーヴェンが第 9 交響曲をスケッチ通りに弦楽四重奏曲第 15 番の終楽章で終えていたなら、音楽社会学は大きく書き換えられたに違いない、と想像することがある。「合唱付き」の終楽章によって純粹音楽としての交響曲は物語性を帯びた劇的なものになった。しかし、それと同時に、芸術音楽は圧倒的なメッセージ性を伝える文化－政治装置として民主主義の時代の大衆に迫る。ニーチェはそのような音楽、思想、文化のあり方を俗悪だと考えた。ニーチェはルソーの民主革命と親和性をもったベートーヴェンの音楽は一過性のもとだとみなし、次に来るドイツ・ロマン派の音楽が愛国主義に堕したことを批判した。かつてドイツは「哲学と詩人（そして音楽）の国」であったが、ナポレオンからの解放戦争以後ドイツ文化は下り坂になった。そしてついにビスマ

ルク帝国においては、政治があらゆる真剣を飲み込みドイツ人は思索することをやめた。「ドイツ、すべてに冠するドイツ」[「の引用符は、ホフマンの「ドイツの歌」から直接引用する場合に用いた]、これこそがドイツ哲学の終末であったのだと、私は危惧する」、とニーチェは時代にたいして診断を下した。<sup>1</sup>

時代は下ってワイマール時代、クルト・トゥホルスキーは「すべてに冠するドイツ」を「大口叩きの詩の、ばかげた詩句」とこきおろした。現代のメディアがドイツ国歌の問題を批判的に論ずるとき、ニーチェとトゥホルスキー、この二人の警世家の否定的評価は好んで取り上げられる。<sup>2</sup> 一方、ドイツ教員組合 (Gewerkschaft Erziehung und Wissenschaft=GEW) は、「すべてに冠するドイツ」の一節は次に続く政治地理上の表現「マース川…」と呼応しており、「ナショナリスティックで帝国主義的」な性格を含意する歌は移民国家としてのドイ

<sup>1</sup> ニーチェ、「民族と祖国」『善悪の彼岸』。引用は、同『偶像の黄昏』、77 頁。また、『道徳の系譜』では、ドイツの精神荒廃の原因を「新聞と政治とビールとワグナー音楽」に求め、その前提に「世界に冠たるドイツ」の「偏狭な原理」があるとする (578 頁)。なお、ニーチェの原文は、Web 上の Colli/Montinari 版で確認した。

<sup>2</sup> たとえば、*Der Spiegel* の記事 “Die blödsinnigste Parole der Welt”. Deutsche Nationalhymne を参照。トゥホルスキーのものと文は次のとおりである。「冗談半分に、この本に大ぼら吹き詩の、あのばかげた詩句「世界に冠するドイツ」なんて表題をつけたけど、とんでもない。ドイツはなんにでも勝っているわけでもないし、なにものをも凌いでいるものでもない、けして」[一部、改訳] (トゥホルスキー、235 頁以下；Tucholsky, S. 230)。

ツにとってもふさわしくない、と歴史批判と現代のグローバル課題の観点から国歌批判を展開する。<sup>3</sup> ドイツ国民の多くは自分たちの国歌を「恥じている」、とドイツ国歌を擁護する小著ですら書き起こしているのである (Kurzke, S. 42)。

二つのドイツ帝国、ベルリンとボンを首都とする四つの共和国、近代に入ってドイツ国家が建設されるたびに「ドイツの歌」への批判は繰り返されてきた。そこに近代ドイツにおけるネーション観念の不安定さの反映をみることが正統的な歴史理解であろう。ネーションを語ることへの躊躇いや自信の欠如、嫌悪感が、しばしば強力なナショナリズムと同居してきた、その振幅の幅を「ドイツの歌」への賛同と批判の歴史をたどることによって測定してみようというのが本稿の課題である。敷衍すれば、ドイツでは、近代国家であるならどの国家もそなえているはずの、時には憲法にまで明記されているはずの国歌が容易に定まらなかったこと、定まっても現在なお批判にさらされることが多いこと、そこに表現されるドイツ国家とネーションの関係の不安定さとその克服の過程をスケッチすることを課題とする。ドイツ人の「ドイツの歌」との付き合い方は、ドイツ国民のそれぞれの時代の国家との関係性、すなわち国家への憧憬と熱狂、そして拒絶の態度を示す物差しであったことを論ずることによって国民国家の特質の一端を明らかにしようというのである。その際、国歌というナショナル・シンボルをめぐる論争をドイツに生じた「特殊な」現象としてのみ論ずることはしない。近代国家は学校教育、博物館や記念碑の建設といった文化政策を通して言語と思考の国民化をはかる。ただし、統一国家の建設の遅れたドイツにおいては、その役割を啓蒙主義の文化を継承する新聞や雑誌といったジャーナリズムと様々なタイプの市民結社が担ったことは特徴的であった。しかし、G.L. モッセ (George L. Mosse) や B. アンダーソン (Benedict Anderson) のナショナリズム研究が示しているのは、近代のネーションはどこでも文化国民として立ち現われ

るということである。国民歌謡や国民文学、国民オペラの創作、あるいは歴史的遺産の顕彰といった文化的意匠を駆使するによって国民統合をはかることは、国民大衆の政治動員が求められる時代にはどの国家も直面する課題であった。<sup>4</sup> 前述のニーチェの文化批判は文化を通してネーションを実体的に客観化することへの異議申し立てであった。

本稿は、ドイツ国歌の成立事情という観点からドイツ国民の生成の歩みを概観する。ドイツ国歌に関する議論は従来、主に文学史や音楽史あるいは法律論といった分野で扱われてきた。それとも、まったくジャーナリストティックな話題であった。それをあえて、ドイツ国歌を歴史学の問題として取り上げるのは、同時代人の言説を生きた政治イデオロギーとしてではなく、文化・社会的機能の文脈で解読しようとするナショナリズムの研究は国歌といった通俗的な素材にまで対象を拡げることが求めているからである。<sup>5</sup> 「ドイツ人の歌」に対して、作者は国民歌謡としての文学的成功を夢み、版元は商業的利益を期待した。それはやがて民族の誇りの表現であると称賛された一方で、その唯我独尊的膨張主義を批判され、人種主義的側面すら指摘された。国民の文化アイデンティティの一部としての国歌に対する、このような期待の揺らぎをたどることによって、国民国家の特質の考察へ寄与することが本稿の目的である。

全体の構成は、まず西ドイツにおいて「ドイツの歌」が国歌に採用されたことによって国歌論争が発生したことを確認する (Ⅰ)。次に、時代をさかのぼって論争的である「ドイツ (人) の歌」の誕生とドイツ国家への受容の問題を論ずる (Ⅱ)。最後に 1980 年代以降再統一後の政治文化におけるドイツ国歌の位置の確定と動揺について考える (Ⅲ)。

## Ⅰ. 1952 年：西ドイツ国歌論争の起源

第二次世界大戦後、日本の政治学や歴史学、また政治

<sup>3</sup> 教員組合を代表する著作としては、Ortmeyer, *Argumente*. を参照せよ。かつて、『朝日新聞』はオルトマイヤーへのインタビュー、「国家への批判深まるドイツ」(1994 年 10 月 21 日付朝刊) を掲載している。

<sup>4</sup> アンダーソンは、『想像の共同体』、31 頁以下、119 頁以下 (原著、p. 9ff, p. 67ff)。モッセについては後述 (p. 84)。柄谷行人の「帝国とネーション」は日本の近代に関する評論であるが、そこでのアンダーソンの扱いは「ドイツ史の特有の道」論を再考するうえで刺激となった。近代社会の疎外に対抗する「文化的ナショナリズム」を論じたニッバーダイも重要である (後述 p.87)。

<sup>5</sup> Mosse, *National Anthems* はこの観点からするほぼ唯一の文献である。加えて、Hermand と Kurzke (ともに、ドイツ文学史)、それに Hattenhauer (法制史) の論攷を全体を概観するために利用した。Knopp/Kuhn はジャーナリストの作品らしく多くのエピソードと国民世論の紹介で構成されている。これらの著作を通じて、特に現代史部分については日常的に目にする新聞・雑誌の記事が政治文化の分析に利用可能であることを改めて確認した。ただし、ジャーナリズムの利用については、高橋論文が行っているような社会的ミリューの視角を導入する余裕はなかった。その他、資料集としては *Materialien* を利用した。その他の文献としては、Zeichner は音楽資料を社会史的に取り扱うという歴史学の新たな領分を示す。木村論文も音楽学の分野に属する。Häberle は世界の国歌の憲政史上の位置を紹介する。

運動においてはナショナリズムという用語は「民族主義」と訳され、植民地独立運動や従属地域の自立の動きに共感する言葉として用いられた。ところがドイツではナショナリズムは国民社会主義と同義として扱われ、全く否定的な用語となった。ドイツ国民は攻撃的な膨張主義や人種主義を含意するナショナルなものを忌避した。第三帝国の崩壊によってもたらされた、そのような政治的な真空地帯に西側の占領軍政府は民主的諸制度を強制的に導入し、ドイツ国民を民主主義に再教育しようとしていた。しかし、過剰なナショナリズムの横溢により国民感情が後退するとともに一般のドイツ人の間には政治的無気力と無関心が広がっていた。<sup>6</sup> ドイツ人の国民的協働の得られない民主化の意義を、イギリスの歴史家テイラー (A. J. P. Taylor) は、全く理解できなかったという。「民主主義は実践によって学ばれるものであり」、政治的な花嫁学校に腰かけて学ぶべきことではないからである (テイラー, p. iv [Taylor, p. x])。

ドイツの政治家やジャーナリスト、思想家たちも国民政治の空白を満たそうとしていた。<sup>7</sup> まず何よりも、人々の間に広がる国民や国民国家への深刻な疑念に答えなければならなかった。『ツァイト』紙の論説委員であったフリートレンダー (Ernst Friedlaender) は “Nationalist” (民族主義者)、“Nationalismus” (ナショナリズム) “nationalistisch” (ナショナリスティック) という用語を検討することから始めた。最近の過激なナショナリズム体験は、「健全な」精神なら理解できるはずの「悪しきもの」と「善しきもの」の概念を混乱させ、「ナショナリスティックなもの」と「ナショナルなもの」との本来あるべき区別をわかりにくくしてしまった。しかし、両者が区別される限り、「ナショナルなものを捨て去らねばならない理由はない」のである。また、「ナショナルな自己憎悪にさいなまれて、いっそドイツはこの世から消

滅した方がよい、近隣諸国の望むままに分割されることに同意するような少数勢力に賛成する根拠」もないのである (Friedländer, Nationalismus)。だが、ナショナリズムへの肯定的な態度を示すフリートレンダーの議論はナショナリズムの復活に警戒的な占領軍当局やドイツ知識人には受け入れられなかった (Alter, p. 162)。西ドイツにおいて、ドイツ・ネーション形成の問題を積極的にとりあげる研究が現れるのは1970年代後半以後である。例えば、オットー・ダン (Otto Dann) は近代ドイツの国民史を概観するにあたって、否定としてのナショナリズムと公民としてのネーションを対置し、“national”と“nationalistisch”という形容詞を区別することから始めている。その概念操作の背景にある動機をフリートレンダーの問題意識と比較することも可能であろう。<sup>8</sup>

戦後ドイツ国民はナショナルなものに強い忌避を示しただけに、ナショナル・アイデンティティの構築の作業は政治に難題を突き付けることになった。その困難はとりわけ、ネーションの存在を客観的に対象化することを目的とするナショナル・シンボルの採用をめぐる混乱に反映された。<sup>9</sup>

連合国管理理事会の法律第1号 (1945年9月20日) はナチ党政権時代の諸法律を廃止した。その1d) は、廃止すべき法律として、「ナショナル・シンボルの保護に関する法律」(1933年5月19日)を指示した。続いて、「軍事教育の排除と禁止に関する法律第8号」(1945年11月30日)第4条において軍服やナチ党の制服の着用、標徴や旗などあらゆるシンボル、勲章の使用、ナチ党式の敬礼などが禁止されるとともに、「ナチ精神を表現するあらゆる儀礼的行為」が禁止された。この時期すでに各占領地区では占領行政が進められており、アメリカ占領地区では、「軍国主義的または国民社会主義的な歌または音楽、あるいはドイツ国歌または国民社会主

<sup>6</sup> イギリスのドイツ史家トレヴァーローパーのドイツ観察 (1947年) を、フリートレンダーは『ツァイト』紙上に紹介している。ドイツは政治的真空状態にあること、独善的な幻想が失われた後には、何らの責任感も獲得されていないこと、そして、ドイツ国民は罪の意識を感じる能力もなく、「不幸の意識を夢想する」ばかりである。これに対して、フリートレンダーは、ドイツ人の心理的な真空はドイツの分割占領によってもたらされていること、ドイツは統一と平和以上のものを望んではいないと反論している (Friedländer, Das Vakuum)。

<sup>7</sup> Alter, Nationalism and German politics を概観として参照した。そこではマイネッケ、ゲアハルト・リッター、ヤスパース、フリートレンダー、ホイス、レープケ、もちろんアデナウアーなど大学教授から政治家まで幅広い分野の人々が取り上げられている。また、172頁以下ではナショナル・シンボルが論じられている。

<sup>8</sup> ダン『ドイツ国民とナショナリズム』、1-18頁および訳者の解説、pp. ix-xii頁。ダンには、1970年代後半には、政治学者 K.W. ドイツのネーション形成論に依拠してナショナリズムの歴史を論じていたが、そこでは次のように書かれていた。「これまでナショナリズムに学問的に取り組もうとすると、たいいていはその極端な形態、すなわち国民社会主義に集中してきた。それに対して、ナショナルな自決権を実現するための政治運動としてのナショナリズムの真正の形態は後景に置かれていた」(Dann, Nationalismus und sozialer Wandel, S. 7)。

<sup>9</sup> Hattenhauer, Deutsche Nationalsymbole, によれば「わが国の最近の歴史が示したほどに、自分のナショナル・シンボルをこれほどいい加減に扱った民族はいない」(S. 8) 1980年代の世論調査においても、西ドイツ国民は自国民であることに誇りを持ってない国民であった。Vgl. James, A German Identity, p. 1.



義の歌を歌い、演奏する」ことが個人にも集団にも組織にもあらゆる機会において「禁止され、違法」とされた（アメリカ占領軍政府法律第154号1h〔1945年7月14日〕）。続いてイギリスもこれにならった（Ortmeyer, *Argumente*, S. 77f.）。そのため、1949年5月、ドイツ連邦共和国は国歌を持たない国家として成立した。国旗に関してはドイツ帝国とナチ政権時代の黒白赤ではなく、ドイツの自由主義運動の象徴である黒赤金が採用され、基本法にもその旨規定されている（「ドイツ連邦共和国基本法」第22条②）。他方、ドイツ民主共和国では1949年に作られた「廃墟よりよみがえり“Auferstanden aus Ruinen”」（ヨハネス・R・ベッヒャー作詞、ハンス・アイスラー作曲）が国歌とされた。新しい国歌を定めるということは（「ドイツの歌」を含む）ナチズムを生み出した伝統との決別宣言であった。国家が東西に二分されるという現実、国歌の分裂をももたらした。

1949年8月の西ドイツ議会選挙とともに事態が動き出した。<sup>10</sup> オット（Franz Ott, WAV〔経済再建連合〕）ほかの12名の超党派の議員が、「ドイツの歌」を「元のそのままの形で」ドイツ連邦共和国の国歌とする法案を提出するように政府に要請したのである。その理由は、ホフマンの歌詞は傲慢なものではなく、他の民族や国家を貶めるものでもなく、「自然の自明な民族意識」から生じたものである、というものであった。<sup>11</sup> この動議が否決されたのち、根本的な疑問が浮かび上がった。そもそもドイツ国歌を決める権限は誰にあるのか？ 議会が大統領か？ 連邦議会の法務委員会は連邦国歌に関する決定は大統領に任せる意向であることが明らかになった。連邦共和国の初代大統領テオドル・ホイス（Theodor Heuss, FDP）は、ドイツの新生は新しい国歌で示すべきであり、重荷を背負った「ドイツの歌」の採用に否定的であった。「ドイツの歌」の第一連はもはや西ドイツの領域に合致しないし、第二連はとっくにつまらない文句になっている、第三連だけでは物足りない、またハイドンの曲に新たに歌詞を付加することも見込みがないと思われた。

ドイツの歌を支持するアデナウアー（Konrad Adenauer,

CDU）首相はこれに「奇襲」（シューマッハ）で応じた。アデナウアーは、1950年4月18日、戦後初めて訪れたベルリンのアメリカ占領地区にあるティタニア・パラストで開かれた集会の締めくくりに、突然、「統一と正義と自由」と「ドイツの歌」第三連を歌いはじめ出席者に同調を求めたのである。三カ国のベルリン占領軍司令官は当惑しながら着席したままであったが、社会民主党（SPD）代表の対応は分かれた。多くの議員は憤然と席をけて退出したが、会場にとどまった議員の中には、西ベルリン市長のロイター（Ernst Reuter）ほかの左派系の古参議員も見られた。このナショナリスティックなスキャンダルに外国のメディアはナチ時代を思い起こさせるものとして友好的とは言えない反応を示した、と『シュピーゲル』は伝えた。<sup>12</sup> 占領軍当局は首相の行為を「無思慮」、アメリカ国務省は「過ち」、イギリス外務省は「悪趣味」と批評した。社民党党首クルト・シューマッハ（Kurt Schumacher）は首相の行為を「賢明とは言えない」と評したが、彼自身は「ドイツの歌」を支持していた。一方、与党は大統領の行為を遅かれ早かれ必要となる「クーデタ」とみなした。<sup>13</sup>

ホイスは「信仰の国、希望の国、愛の国」と謳う新曲（「ドイツ讃歌」）を1950年の大晦日にラジオで放送したが、国民の支持は得られなかった。<sup>14</sup> 他方、「ドイツの歌」を支持する民間の動きも活発となった。ホフマン・フォン・ファラースレーベン協会（Hoffmann von Fallersleben-Gesellschaft, 1936年設立、48年に再建）は「ドイツの歌」全三連を国歌として認めるように求める小冊子を発行し、そこにはフルトヴェングラーやクナッパertzブッシュなどドイツの歌を支持する著名な音楽家や文化人が結集していた（Ortmeyer, S. 81など）。しかし、1951年末の段階でアデナウアーは国民がドイツの歌を支持しているかどうかは、確信を持てなかったと考えられる。政府は国民に対して、「ドイツも他の諸国と同様に再び国歌を持つべきです。ドイツの歌を再び取り上げるかどうかまだ決まっていません。ドイツの歌を再び導入することに、あなたは賛成ですか反対ですか」、と問う調査をアレンスバッハ世論調査研究所に委

<sup>10</sup> 以下、*Materialien*, S.17f. 西ドイツ国歌が成立する以前にも、国歌の空白を埋める議論はあった。

<sup>11</sup> *Antrag der Abgeordneten Dr. Ott und Genossen von 29. September 1949*. 全文は *Materialien*, S.51. にも収められている。動議を提出した議員はナチ時代にも活動したことがある右派系の議員たちであり、後の国家民主党（NPD）の党首となる人物も含まれていたことは、Ortmeyer, *Argumente*, S. 78f.

<sup>12</sup> Staub, in: *Der Spiegel*. Vgl. Hermand, *Zersungenes Lied*, S. 70.

<sup>13</sup> この経緯は、Knopp/Kuhn, S. 102. また、Jens, *Vaerländischer Mißklang*.

<sup>14</sup> Vgl. Hattenhauer, S.96ff., Knopp/Kuhn, S. 104ff. この「ドイツ讃歌」はルドルフ・アレクサンダー・シュレーダーが作詞した。作曲を依頼されたカール・オルフは自分の代わりにヘルマン・ロイターを推薦した。1951年1月の世論調査では、新曲への賛成が8%、反対が29%、40%の人が放送を聞いていなかった（*Materialien*, S. 18）。ギュンター・グラスは「非詩（Ungedicht）」と呼んだ（Ortmeyer, S. 80）。

託した。結果は明白だった。およそ西ベルリンを含むドイツ連邦共和国領に住む成人回答者の75%が賛成し、明確な反対意見はわずか9%であった。また、過半数の回答者が第一連に対して第三連を支持した。賛成派が与党支持者ばかりでなく、社民党やバイエルン党などの野党支持者にまで広がっていることが特徴的であった。<sup>15</sup> 政府は『政府広報』(第5号 [1951年11月6日付]) 掲載の「統一と正義と自由」で調査結果を公表し、次のように、議会内与党が推す「ドイツの歌」第三連への国民の支持を求めた。ドイツの歌は第三帝国の時代に乱用され、第一連についてはナショナリズムの高揚を懸念する声が国内外にあるものの、「ドイツの歌ほどドイツ民族の魂に深く根を下ろしている歌はほかになく、第三連こそが民族の魂と精神の状態を、そして現下のドイツ民族としての課題の本質を表現しているのである」(Einigkeit und Recht und Freiheit, in: *Materialien*, S. 59f.)

1952年初め、ホイスは野党社民党とドイツ労働組合同盟(DGB)の動向をなお見極めたいとしていたが、アデナウアーはいわば最後通牒を突き付けた。同年4月29日付け大統領宛書簡においてアデナウアーは、過去2年間の経緯を振り返りつつ、新国歌創設の試みが挫折したことをうけ、内閣の意向として「ドイツの歌」第三連に決定するように大統領にお願いすることになった、大統領の反対意見には内政上の正当性があったこと認めるが、外国代表臨席の外交典礼のすすめ方という「外交政策上のリアリズム」から、もはや遅滞は許されないと大統領に決断を迫った。かつて「ドイツの歌」を国歌とすることを決断したエーベルト大統領のひそみならず、「ホフマン・ハイドンの歌をドイツ連邦国歌として認めくださるようには内閣は改めてお願い申し上げます。国家行事に際しては、第三連を歌うべきものとします」

1952年5月2日付の返書においてホイスは政府の請願に応ずる旨を伝えているが、忸怩たる思いも吐露せざるをえなかった。

私たちの民族と国家の歴史にあのような深い切れ目があることから、私たちが経験した歴史的悲劇に混じりけのない自由な魂をもって、また事態を明晰に客観的に認識しつつ立ち向かうためには

新しいシンボルを必要とする、こう私は思っていました。どうやら私は思い違いをしていました。わたしは伝統主義とそれに固執する欲求を過小評価していたのです。(Briefwechsel zur Nationalhymne von 1952; *Materialien*, S. 63f)

1952年5月6日付『政府広報』第51号は往復書簡によって(どこにも明言されていないのだが)ドイツの歌が再びドイツ国歌と承認されたことを以下のように伝えた。国家的行事に際して「ドイツの歌」第三連を歌うべきであると定まったことはドイツ政治がナショナリズムを志向することはないことの記録であり、内外に向けて国家生活が安定してきたことの標でもある。ドイツ国家が西側世界の一員として同様の地位を確保するためには、国歌の安定性を示す必要がある。そのためにも、ホイス大統領の決定が余計な批判をこうむらないことが望ましい。かつて、ワイマール国家成立期の混乱と党派闘争を解決することに腐心したエーベルトは、ホフマン・フォン・ファラースレーベンの心情に思いをはせながら、黒赤金の旗のもと「統一と正義と自由」と歌うことを提案した。この考えは現下においても有効なのだ、とこの広報はこれから生ずるであろう国歌論争を予防するかなのような言葉で結ばれている(Das Deutschlandlied)。

「ドイツの歌」を国歌として採用することによって内政上・外交上の不和が引き起こされることを避ける。そのためにアデナウアーはナチ時代の記憶が生々しい(ホイスは、ドイツの歌はホルスト・ヴェッセル・リートを引き立て役と呼んだ)第一連を国家行事から切り捨てた。しかし、国家行事においては「統一と正義と自由と」の第三連のみを歌うということはどういう意味なのか? ‘<sup>ドイツ・チュラント、ユーバー・アレス</sup>すべてに冠するドイツ’の一節は国歌に含まれるのか、それとも三連全体が国歌なのか、あるいは国歌とすべきか? 1954年7月、サッカー・ワールドカップで西ドイツが優勝した時には、ドイツ・サポーターから‘すべてに冠するドイツ’の歌声が競技場に鳴り響いた(後述、p.92 注49)。一般国民は政治指導者の思惑とは関係なく「ドイツへの歌」のきずなを示したのである。したがって、「ドイツの歌」が国歌に採用されたことに対して外国メディアの反応がきわめて否定的であったことも十分に理

<sup>15</sup> *Materialien*, S. 18., Zeichner, S. 41f. 「ドイツの歌」の第一連と第三連のどちらを支持するかという質問に対しては、第三連支持=30%、第一連支持=25%、同じ程度=11%、ほかの答え=7%、「ドイツの歌」を支持しない=27%であった。

解できることである。<sup>16</sup>

ドイツのメディアの多くはホイスの処置を自明のこととして肯定的に評価した。西ベルリンの『ターゲスシュピーゲル』紙は、「東の抑圧された同胞のことを思うとドイツの歌は伝統の改新というよりも、将来に向かっての義務である」と記した。<sup>17</sup> 実際、「統一」には東ドイツとの統合、「自由」には共産国家の全体主義的抑圧からの解放というアデナウアーの政策意図が含意されていると解釈されている。ドイツの歌は事実上の国歌として承認されただけであって、議会内闘争に巻き込まれることを避けるために立法化されなかった。こうした懸案の処理の仕方を肯定的に評価する意見は現在もある。<sup>18</sup> しかし、「すべてに冠するドイツ」を歌ったら処罰されるのか、もしそうならどういう場合にそうなるのか、不明なままであった。逆に、国歌斉唱に加わらないことは国防軍の兵士にも許されていた。もともと「統一と正義と自由」の歌詞は人口に膾炙しておらず、ハイドンの皇帝讃歌の旋律を聞いて人々が思い浮かべるのは第一連であった。人々の記憶に固着した第一連を切り捨ててしまうことは、むしろドイツの犯罪を忘却させることになるのではないか、ドイツの歌第三連の採用はアデナウアー政権の不十分な過去の克服の象徴ではないかという批判的見解も現在では出されている (Zeichner, S. 42)。そもそも、暫定的とされた西ドイツ国家の民主主義体制に国民は一体感を持つことができるのか。

「ドイツの歌」が引き起こすこのような諸課題の全体を「国歌論争」という。論争の焦点はこの歌に表明されたナショナリズムをどのように解釈するかという点にあった。問題の解明のためには、三月前期のドイツにたち戻ってホフマン・フォン・ファラースレーベンが「ドイツの歌」に込めた文学的・政治的企図を探ることから始める必要がある。

## Ⅱ. ヘルゴラント島からワイマールへ

本節では、ホフマン・フォン・ファラースレーベン (Hoffmann von Fallersleben) の「ドイツの歌 (Deutschlandlied)」の創作意図をいささかたちいって探究する。すなわち、ドイツが言語＝文学作品を通してネイションとしての共同性を獲得していく時点にもどって考察する。 (「ドイツ人の歌」の拙訳、およびホフマンの生涯については、後述の補説を参照のこと)

議論は国民政治における国歌の問題から始めたい。

フランス革命が近代国民国家の成立の契機をなしたということは、国民讃歌としての国歌 (Nationalhymne, national anthem) の歴史は「ラ・マルセイエーズ (La Marseillaise)」を画期とするということでもある。ゲオルゲ・L・モッセは、人民主権とナショナリズムの協働が生み出す近代に特有の政治様式のことを語っている。近代の政治は民衆自身の政治参加を通して一般意志を具現化することをめざす。しかし、その具現化は国家という枠組みでしか実現されないため、国家の運命を左右する決定には国民化した大衆を動員しなければならない。国民の神話やシンボル、祭儀や典礼といった装置が国民国家への帰属感を涵養する。国旗・国歌・国民祭典といったシンボルを通して新しい国民はその人民に向かってその姿を顕現し、ゆるぎない献身の心と呼び覚ますことになる。フランスの人民はラ・マルセイエーズを歌いながら革命防衛戦争に参加した。近代国民は武器をとる国民として誕生し、国歌は軍歌であった。<sup>19</sup>

フランス革命とともに生まれた人民を讃える歌 (Volkshymne 人民讃歌、または民族讃歌) に対して、近代の国歌のもう一つの古い起源は君主を讃える歌 (Königshymne 国王讃歌) である。国王讃歌は本来特定の民族意識ではなく、普遍帝国の思想に基礎をおくものである。ハノーヴァー朝の君主を讃える歌であった「ゴッド・セイヴ・ザ・キング (God Save the King)」は、讃

<sup>16</sup> 『シュピーゲル』は、「汝の血をわが大地にしみこませよ」のラ・マルセイエーズの精神で反応している、とフランス・メディアの反応を伝えている。批判は、ド・ゴール派 (「すべてに冠するドイツ」を国歌とするという大統領宣言は…最悪の事態を懸念させる)『ス・マタン』から中道 (「かの復古思想は…時代遅れとなったと思われるが…どんな力も抵抗できなかったドイツの習俗と思想が呼び覚まされるであろう」『ル・モンド』)、さらにフランス共産党 (「軍国主義への、復讐とファシズムへ向かう急速な傾斜がボン政府を…」『ユマニテ』)にまで及ぶ中で、極めつけは『リベラシオン』の批評である。そこには、かの地理的表現が取り上げられている。「マース (ムーズ) 川はフランスを流れている、メーメル (ネマン) 川はソ連を、エッチュ (アディージェ) 川はイタリアを流れ、バルト海峡はデンマークとスウェーデンの間である。大ドイツ万歳、さあ皆さん、いただきましょう」(Mit eurem Blut werdet ihr unseren Boden tränken, in: *Der Spiegel*) また、Knopp/Kuhn, S. 113 も参照。

<sup>17</sup> ドイツ・メディアの反響は、Knopp/Kuhn, S. 112f. *Tagesspiegel* の引用は、ebd.

<sup>18</sup> ハッテンハウアーは、ホイス・アデナウアーの往復書簡は法的には疑義を残したが、大いなる道徳的重みを有していたとする (Hattenhauer, S. 104)。

<sup>19</sup> 全体としては、モッセ『大衆の国民化』を参照、とくに13頁以下。Mosse, National Anthems は、『大衆の国民化』では示唆されただけであった「国歌」について論じている。



美歌風の旋律にこめられた敵国折伏の祈りがプロテスタント国家としての自覚をイギリス国民に促した。<sup>20</sup> しかし、「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」が文字通りイギリス国歌となるためには「ラ・マルセイエーズ」という国民観念を反映した新たな讃歌の登場が不可欠だった。たとえ王国といえども、国民というものが一般意志に基づくものであるとするなら、既存の王統への忠誠を表象するだけでは不十分だったのだ。もっとも、このタイプの讃歌の弱点は国民を戦争に動員する攻撃的な歌詞内容と讃美歌風の旋律との間にギャップが生ずることであった。そのため、ナポレオン戦争の危機に対処するためにより軍国主義的な「統べよ、ブリタニア (Rule Britannia)」が第二の国歌となるのである。<sup>21</sup> 他方、「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」の歌詞は特定の民族性や国民性を直接連想させるものではないため、ドイツ、ヨーロッパの多くの王国がテキストや旋律を借用することになった。プロイセン国歌の「勝利の皇帝を讃えよ〈皇帝陛下万歳〉 (Heil dir im Siegerkarnz)」はもともと18世紀末のデンマークの国王讃歌を改作したものであり、旋律にはイギリスの女王讃歌を転用した (Kurzke, S.11)。

ヨーゼフ・ハイドンはフランス軍がウィーンに迫ろうとする危機のさなか、「ラ・マルセイエーズ」に対抗する讃歌を作曲する。旋律の素材を讃美歌やクロアチアの民謡から得たと推測されているが、歌の内容は旧タイプの君主賛歌であった。ロンドン滞在の豊富なハイドンは国民の士気を鼓舞する国歌の意義と理念を知っていたに違いない (Hattenhauer, S. 70f. および、木村「ドイツ語圏の国歌」、2頁以下)。ホフマン・フォン・ファラーズレーベンの「ドイツ人の歌 (Lied der Deutschen)」はこのハイドンの旋律の歌詞としてピアノまたはギターの伴奏譜をつけて1841年に出版された。ホフマンの作詞によって「神よ皇帝フランツを守りたまえ」という祈

りは「<sup>ドイツチュラント、ユーバーアレ</sup>すべてにまさるドイツ」という国民—民主主義的なスローガンに変わった。しかも、讃美歌に由来するハイドンの旋律が維持されることによって、「ドイツ人の歌」におけるナショナリズムは聖なる性格も継承したのである。讃歌の対象は君主から国民と祖国へと変わり、政治文化は変化していく。ホフマンはハイドンに依拠しつつ讃歌の政治的含意の転換をはかる際に、この歌を国民歌謡とすべく周到な文学的計算を行っていたことを指摘しなければならない。

1840年を一つの転機とし、1848年革命の序曲が始まったということでは同時代の証言も、それらに基づく歴史叙述や文学史研究も一致しているようである。<sup>22</sup> それは、第一に「ライン危機」がドイツの愛国主義的ナショナリズムを刺激したこと、第二にプロイセンにおける王位交代、「玉座のロマン主義者」フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の即位が自由主義的な改革の希望をかきたてからであった。1840年代、ドイツ各地で政治的・社会的緊張が高まった。立憲制をしいている邦国では議会と政府との間の対立が強まり、自由主義者の間に検閲や結社の自由の制限へ不満がつのった。<sup>23</sup>

「ライン危機」とは、1840年、フランスのティエール政府が自国の東部国境としてライン川左岸の割譲を求めたために独仏間に外交紛争が引き起こされそうになった危機をいう。フランス、ドイツ双方のメディアに愛国主義のプロパガンダが飛び交った。個別国家に分裂していたドイツにおいて、作家たちはドイツ国民としての団結のアピールを大衆に向けて行った。ドイツの川としてのライン川を賛美し、防衛を呼びかける一群の愛国歌謡が創作された。ニコラウス・ベッカー (Nikolaus Becker) の「ラインの歌 (Der deutsche Rhein)」(1840年) やマックス・シュネッケンブルガー (Max Schneckenburger) の「ラインの守り (Die Wacht am Rhein)」(同年) は

<sup>20</sup> この国王讃歌は、ジャコバイトとそれを支援するフランスとの敵対という国民政治的な危機が露わになった1745年にドルリー・レーン劇場で歌われて広く流布することになった。リンダ・コリー、47頁以下を参照せよ。また、国歌を、国王讃歌、郷土讃歌 (Landeshymne)、人民讃歌に類型化した Kurzke, S. 9ff. を参照。また、Hattenhauer, S. 67f. も参照。

<sup>21</sup> ベートーヴェンの「ウェリントンの勝利」においては「統べよ、ブリタニア」が英軍を象徴する。戦争とともに生まれた人民讃歌が行進曲であるのに対して、国王讃歌は起立して歌う。Mosse, National Anthems, p. 95. を参照。「ドイツの歌」は、ナチス政権時代に行進曲のテンポとリズムにアレンジされた。

<sup>22</sup> マルクス、エンゲルスという権威にたよるならば、七月革命に衝撃を受けて展開されたドイツの文芸・思想上の変革は未熟な運動であった。「青年ドイツ派」に属する急進的作家グループは立憲主義や共和主義といった概念に十分な考察を加えることなく、諷刺による政治批判を展開することで読者大衆の歓心を買おうとしただけであった。これらの皮相な批判を展開する文芸を「傾向」文学といい、革命派の国際的陰謀をかぎつけたメッテルニヒによる検閲の強化を招いただけであった、と手厳しく断罪している (Marx/Engels, Die moderne Schule, in: Hermand (Hg.), *Der deutsche Vormärz*, S. 11f.)。

<sup>23</sup> ここでは通史的な歴史叙述の参考文献は省かざるを得ない。文学史では、Hermand (Hg.), S. 375ff. が「三月前期」文学研究の標準的解説となっている。

代表的な傾向詩であり、後に「ドイツの歌」の強力なライヴァルとなった。<sup>24</sup> 第一連に‘すべてにまさるドイツ’、第三連に‘統一と正義と自由’といったナショナルスティックな、あるいは国民的な詩句を持つ「ドイツ人の歌」も政治的・文学的に40年代初頭の動向と無関係ではないというのが、大方の見方である。ところが、詩の成立事情を伝えるホフマン自身の後年の述懐によると、「ドイツ人の歌」の誕生にはドイツの政治的惨めさを痛憤する民族感情のみが靈感として作用したわけではなかったことが明らかである。

ホフマンは1840年8月19日から9月21日までの一か月間を、当時はイギリス領であったヘルゴラント島で過ごした。島に向かう船上では、「ラ・マルセイエーズ」や「ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン」などが「にぎやかに演奏された」。<sup>25</sup> 翌年は、8月11日から9月5日までヘルゴラント島に滞在する。今回は、ハノーファー選帝侯のエルンスト・アウグストの憲法破棄に抗議する反対派の連中と同船した。船上ではホフマンの『非政治的な歌謡(Unpolitische Lieder I)』が朗読される。島では「ラ・マルセイエーズ」の演奏が禁止されていた。自由なヘルゴラント島とはいえ警察の目が光っていないとは思えないので、フランスの革命歌を歌うのをあきらめた。ドイツの現状に悲憤慷慨する同志たちとの語らいと酒席の大騒ぎ、いろんな掛け声が飛び交う中、ホフマン自身は「女たち」と叫ぶ（「ドイツ人の歌」第二連！）。8月23日に、ハノーファーの仲間が帰省した。島は静けさに包まれ、ホフマンは孤独を取り戻す。一人岩礁にたたずむと、存在は海と空だけにとり囲まれる。「すると得も言われぬ感情がわいてきた、否応なく詩作せねば、という感情が。こうして、8月26日、‘ドイツ、ドイツ、すべてにまさるドイツ’の歌が生まれた」（*Mein Leben*, S. 200）

「ドイツ人の歌」の誕生はこのように作者本人によって神秘化された。喧騒からの解放、北海の海と空に切り取られた空間に漂う寂寥感がもたらす自我のロマン主義的な膨張、これが詩作のおぜん立てである。ドイツの政治的惨めさに憤る愛国の感情は外国領の孤島での憂愁と共鳴しあう。このように『自伝』に述懐された限りにおいては、1840年代初頭の政治的喧騒から一歩距離を置

く形で「ドイツ人の歌」は成立したことが主張されている。どうやら、ホフマン自身は自作の「ドイツ人の歌」が単なる傾向詩以上のものになることを期待していたようである。しかし、作者の思惑を超えて国歌にふさわしいかどうかという政治論戦（国歌論争）に巻き込まれていくことになる。その際、互いに関連しあう二つの論点を取り上げられてきた。第一に、ホフマン自身の政治姿勢、「フランス人嫌い」を伴う愛国主義の評価の問題、第二に、「ドイツ人の歌」は攻撃的な歌か、それとも実現せぬ民族統一への憧憬の歌かという問題である。

1839年の夏学期、ブレスラウ大学の教授であったホフマンは在外研究のため長い休暇をとった。3月7日にブレスラウを旅立ち、帰宅したのは10月11日であった（*Mein Leben*, S. 167-181.）。<sup>26</sup> ザンクト・ガレン修道院の図書館を訪ねるなど古い文献の探索が主な旅行目的であったが、各地の文人・作家たちとの交流こそが大きな収穫だった。自由主義者や共和主義者と交わり互いにドイツの悲惨な状況について語り合う。フランスやスイスの事情や文芸の状況もつぶさに観察することができた。恩赦が受けられなかったゲッティンゲン大学の七教授の運命も話題にのぼった。「この旅が私に与えてくれた特典、それは、私の政治に対する見方があるときは正すことができ、またあるときはそれに確信を持つことができたことであった」、とは後年の述懐である。帰宅したホフマンは大学の講義に復帰しながら、「私たちの情勢、実際それは過去にはどうだったのか、今はどうなのか、そしてどうすべきか、どうなりうるのかを明らかにするために歴史、政治、統計といったあらゆるものを読書した」。そして、「過去と現在の情勢への私の共感する気持ちが大きくなればなるほど、そのことを詩を通して表現したいという衝動はますます大きくなっていった」。ホフマンは一冊にまとめ上げた草稿をハンブルクで書店を経営するユリウス・カンペ（Julius Campe）に送付する（1840年3月16日）。41歳のホフマンは政治詩人たることを決意した（*Mein Leben*, S. 181f.）。こうしてカンペ書店から刊行された『非政治的な歌謡』第1部、第2部はドイツの現状批判によって多くの読者を獲得することになる。しかし、カンペ書店のすべての刊行物とホ

<sup>24</sup> ライン危機とナショナリズムについては、ダン、『ドイツ国民とナショナリズム』、77頁以下。文学史では、Hermand (Hg.), S.127ff. には、「ドイツ人の歌」をはじめとするライン危機に生まれた代表的な愛国歌謡が収められている。Vgl. Scholz, S. 161ff. 邦語では、木庭、『民族主義との闘い』がハイネの『冬物語』に即してこの危機を扱っている。

<sup>25</sup> *Mein Leben*, S. 188. 翌年、「ドイツ人の歌」に曲をつけるとき、ホフマンはこの体験を思い出したとされる。

<sup>26</sup> 旅はまず、オーストリア、バイエルン、ヴュルテンベルク、スイスに至る。次に、バーゼルからフランスへ、7月9日にパリに入った。そこからリヨンに行き、再びスイス各地をめぐり、バーゼルからアルザスに入った。ケールから蒸気船でケルンまで下り、今度は駅馬車などを利用しながらなじみのベルギーへ、そしてドイツへ向かって帰郷の途へついたのが9月13日であった。



フマン自身の詩集がプロイセンなどで発行禁止処分になったことに端を発し、<sup>27</sup> 教授職を追われたホフマンは隠れ家と支援者を求めてドイツ各地を転々と放浪しなければならなかった。やがて政治への関心を失い、フランクフルト国民議会への議員選出も辞退した。後年のホフマンはコルヴェイ修道院付属の図書館員として失意の生涯をおくるのだが、「ドイツ人の歌」だけは毀誉褒貶を伴いながらドイツの近代国民史の一コマを形作っていくことになった。以下、「ドイツ人の歌」のテキストに即しつつドイツ史の文脈においてホフマンの創作意図を解読してみたい。

第一連冒頭の「世界に冠するドイツ」とも解される句は、ドイツ帝国の膨張主義やナチズムの人種主義の先取りとみなされてきた。さらに、「護りを固めて」と続く部分は40年代初頭のフランスとの緊張関係を想起させるものである。もともとこの表現は17世紀のオーストリアのフィリップ・ヴィルヘルム・フォン・ホルニク (Philipp Wilhelm von Hornick、または Hörnigk) の「オーストリアは、その気になりさえすれば、すべてにまさることが可能なのである」(“Österreich über alles [sein könne], wenn es nur will”) に典拠があることが指摘されている。このカメラリストの外交官は、トルコ戦争の苦境にあり、フランスと外交的に対立していたオーストリアを鼓舞する議論を展開する中でこの表現を使ったのである。それはナポレオン戦争期にドイツの国民感情が高まるなか官房学の文脈から切り離され、「すべてにまさるドイツ」と詩の表現に置き換え変えられるのである。<sup>28</sup> ところで、「ドイツ、ドイツ」で始まる「ドイツ人の歌」の第一連は述語を欠いているため、ドイツが「すべてにまさって」何なのか、ドイツを愛するののか、ドイツが支配するののか不明なままである。<sup>29</sup> 解釈は、国民-

民主主義から盲目的な愛国主義まで、帝国主義から人種主義まで、可能なのだ。したがって、ナポレオン解放戦争期から三月前期の小国分立状態のドイツの状況を考慮すると、「すべてにまさる」とはオーストリアにもプロイセンにもバイエルンにも、ドイツ連邦の諸王国よりもドイツがまさるのだ (大切なのだ) という大ドイツ主義的な祖国感情の吐露であって、フランスやイギリスやロシアにまさるドイツを意味するのではないと解釈すべきなのだという説が有力である (Kurzke, S.42f.)。一方、モッセは次のように分析している。「ドイツ人の歌」にはたいていの国歌に好戦的な外観を与えている死とネイションの連関が欠けている。しかし、ひたむきにドイツにのみ焦点を合わせてきたために、この歌は容易に攻撃的な解釈が可能になったのだ、と。ホフマンの、そしてドイツの民主的愛国主義者の「ドイツのみ」の姿勢が啓蒙主義に由来する世界市民主義の遺産の継承を難しくしたのである (Mosse, National Anthems, p. 90f.)。

「ドイツ人の歌」のテキストは長年にわたって伝えられてきた政治的な標語や文学表現から国民的<sup>ナショナル</sup>な意味をもつ片言隻句までをコラージュしたものであり、そこにはホフマンの民謡収集家と文献学者としての経験に培われた趣向がこめられている。<sup>30</sup> 第一連5、6行目の「マース川からメーメル川まで / エツチュ川からベルト海峡まで」の部分は、「ドイツ人の歌」の精神がアルント (Ernst Moritz Arndt) の「ドイツなる祖国とは何ぞや (Was ist des Deutschen Vaterland)」に代表される1813年のロマン主義的・文化的ナショナリズムの圏内にあることを物語っている。<sup>31</sup> アルントの「ドイツの言葉の響くところ」がドイツの祖国であってほしいという願望に対して、「ドイツ人の歌」に歌われたドイツの範囲は非ドイツ系君主が加わっているドイツ連邦の地理的現実を反映

<sup>27</sup> ハノーファー、プロイセンでの発禁処分については、Mein Leben, S. 205ff. この事件を報道した『アウクスブルク一般新聞』は、発禁の理由を、「『政治的歌謡』に収められた」詩はドイツ、プロイセンの公的・社会的状態に辛辣な嘲弄を浴びせ…そこに表現される信条や世界観は読者たち、とりわけ青少年読者の間に既成秩序への不満や…領主や当局への憎悪の念を醸成せしめる…」からと伝えている (木庭、45頁)。

<sup>28</sup> Hattenhauer, S. 73 f.; Sandmann, S. 639ff. 1808年、ハンス・ヨーゼフ・フォン・コリンズ (Heinrich Josef Collins) は『オーストリア軍兵士の歌』(Lieder österreichischer Wehrleute) に収められた歌の中で、「その気になりさえすれば / オーストリアはすべてにまさる! / 兵士たちよ元気に叫ぼうではないか / さあ、気合いだ!」と歌った。1813年、ルンゲ (Johann Daniel Runge) が作った替え歌は次のようなものだった。「その気になりさえすれば / いつもドイツがすべてにまさるのだ / 兵士たちよ元気に叫ぼうではないか / さあ、気合いだ! / 万歳、ドイツ万歳!」(Rohse, S. 59f)

<sup>29</sup> 「すべてに冠する」と訳される語句の原語は 'über alles' である。もし、「すべてのものの上に位置している」「超越している」状態を表すとするなら、この部分は、トゥホルスキーが表現したように 'Deutschland steht (ist) über allem' と3格支配になるはずである (前注2、参照)。とするならば、'über alles' は「何にもまして」という成句風に考える方が妥当なのかもしれない。

<sup>30</sup> Vgl. Rohse, Scholz. ローゼはホフマンの作品の間テクスト性に着目し、「ドイツの歌」における「コントラファクトゥア (本歌取り)」の多用を指摘している。

<sup>31</sup> この概念はニッパードイによる。「ロマン主義的ナショナリズム」、または「文化的ナショナリズム」とは、「すべての文化は国民的であり、国民的なものと理解されるべきだ、ということ。そして、ある国民はその文化の共通性によって規定されている、ということ」と定義される (ニッパードイ、「独自性を求めて」、66頁 [Nipperdey, S. 132])。

するものであった。それは、ネーデルラントからロシアまで、イタリアからデンマークまでを支配するという野望を表明したものではなかった。また、「ドイツ語の響くところ」という要請はドイツ語の標準文語に基づくものではなく、たとえばグリムにとって強い研究動機となったように、多彩なドイツ語方言文化の存在を前提としたものであった。ここに、フランスの集権的な単一公用語主義に抗する、ドイツ特有の文化的・分権的民主主義の萌芽を認めてもよいかもしれない。あるいは、そもそも、境界に水域を挙げるのは修辞法の一つであるにすぎないともいえる。<sup>32</sup> とはいえ、ドイツの愛国主義者がダントンのライン川の要求を詩的修辞として大目に見ることができたかどうかは疑問だろう。

自然や地域を境界に定める「～から～まで」の修辞的表現はすでに中世にさかのぼる。ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide) のいわゆる「頌歌 (Preislied)」、「皆さん、ようこそ」と歓迎してください」の第4節にそれは現れる。「ドイツの生き方はすべての邦に立ちまさる／エルベからラインまで／そこから戻ってまたハンガリーまで／ここには、私が全世界で知った限り／最良の人々が住んでいるとあってよいでしょう」。ヴァルターはこの頌歌において、淑女ではない庶民の女性とのまことの愛 (reine minne) を、ドイツの男の礼節を讃えた。ホフマンはそのひそみに倣うように、「ドイツの歌」第二連にドイツの「女」と「誠」と「ワイン」と「歌」への讃歌を配した。第二連が第一連と第三連のつながりになることによって、詩全体が中世以来の「ドイツ人のアイデンティティを喚起してきた」(ハインツ・トーマス) 文学的伝統へ連なることを保証している、これがホフマンの趣向であった。<sup>33</sup> また、ホフマンは『非政治的歌謡』第2部の巻末に「頌歌」の原文と現代語訳を収録することによって、自作がドイツ至上主義を声高に叫ぶだけの傾向的な文学とは一線を画すものであることを示そうとした。ところが実際には、「酒と男と女」の第二連はナンセンスな無内容であると冷笑され、ナチズムですら、アルコール摂取は健康被害の元凶である、この部分を拒絶したのであった。あるいは、19世紀末の民族主義的団体では、「ド

イツの女たち」とは戦場を駆けるワルキューレの乙女たちであるという解釈がなされるのである (Vgl., Mosse, National Anthems, p. 91)。

「統一と正義と自由」の三標語はナポレオン解放戦争以来の祖国の自由を求める政治文芸に直接的に連なる。すでに、ゾイメ (Johann Gottfried Seume) は1810年に「われわれは統一、自由、正義を獲得する」と歌ったし、アルントは「自由、祖国、正義よ、万歳」と歌った (1814年)。ドイツの分裂を招く各国の私利私欲を批判して民族の統一を求め、自由の憲法を要求し、警察国歌の検閲を告発し、社会的正義を追求する思想や文学は解放戦争期に始まり、若いドイツ、そして三月前期の政治文学へ継承されていく。ゲーテは、神聖ローマ帝国の消滅の時に、アウエルバッハの酒場の場面でブランダーに「野暮な政治の歌はやめろ！」と歌わせたが、三月前期の詩人たちはそのゲーテに抗する。ホフマンはブランダーの歌を引きついで次のように応答する。「ぼくは昔のしきたりのままに歌ってきた／月を星を太陽を／酒と小夜啼き鳥も／愛の無上の喜びも歌った／すると祖国が呼びかけてきた／古いものを捨てよ／使い古したガラクタ琴を／君は時を掴むのだ」(zit. bei Gerstenberg, S. 66f.)

ホフマンの故郷ファラースレーベンが属するハノーファー選帝侯国は1807年のティルジット条約後ヘッセン選帝侯国などとともにヴェストファーレン王国を構成した。ナポレオンの弟のジェロームが王となり、都はカッセルに置かれた。<sup>34</sup> 民衆は大陸封鎖と重い税負担に苦しめられたが…、とホフマンは回想している。法の前の平等、口頭主義・公開主義の訴訟審理、陪審裁判、一般的租税負担、さまざまな宗教共同体の礼拝の自由、公職就任の平等な権利、司法と行政の分離、さらに農奴制、賦役、十分一税、特権、貴族身分の廃止といった「理性のある愛国主義者ならば有益かつ必要と考える多くの善政」が布かれた。市民も農民もそれまでの特権身分と平等の権利義務関係にあることを知り、そしてなによりも「人間としての尊厳を思い知り、自分の地位を公民として捉えられるようになったのである。ハノーファーの地主貴族 (ユンカー) と官僚の支配は無意味な布告 (…)、さらし柱、拷問部屋、絞首台、車裂きの車輪と

<sup>32</sup> Kurzke, S. 42f. マース川の流域にあたるリンブルク地方はルクセンブルク大公領としてドイツ連邦に加盟していた (Hermand, S.64)。1819年、ボン大学でドイツ文献学を志したホフマンはモーゼル川からアイフェル山地、マース川流域へ最初の大きな研究視察旅行を行っている。その際、リンブルク地方の風景の美しさに魅了され、この地方がドイツに入っていないことを遺憾に思っている (Mein Leben, S. 64)。マース川が挙げられているのは、この体験が大きいのではないだろうかと推測される。ホフマンの低地ドイツ語はリンブルク地方の方言とある程度通用力をもっていたと考えられ、そのことからドイツの領域拡大の願望の表明となったのであろう。

<sup>33</sup> Scholz, S. 175. ヴァルターについては、ハインツ・トーマス、272-275頁を参照。

<sup>34</sup> ホフマンは1810年の状況を、「ドイツ全土がフランスのものになったかのようにみえた」、と記している (Mein Leben, S. 22)。

ともに消え去ったのであった」(Mein Leben, S. 23f.) しかし、まもなく復活する貴族支配が多くの改革の成果をひっくり返してしまったことに、ホフマンは憤りを覚える。とはいえ、ホフマンが歓迎したこれらの諸改革はフランス人王のもとで強制されたものであった。ナポレオン法典の導入などの諸改革への評価は、秘密警察の監視や検閲、青年の戦線への動員といった過酷なフランス支配への憎悪によって相殺される。自由への改革は民族的恥辱と表裏一体なのであった。ライプツィヒの戦い(1813年秋)の直後、ホフマンはフランスへの複雑な思いを記している。「フランス人への憎しみはその人への憎しみだけに限るとして、彼らの言葉は世界の三大言語の一つであり、諸民族の交流には必要であるとぼくらは思っていた」(Mein Leben, S. 32)

憲法にしっかりと定められた自由、集会結社の自由、意見発言の自由と検閲の廃止、三月前期の政治は三月革命に向けて自由の問題へと収斂する。自由は民族のものであり、民族は自由である観念されていたのは、ドイツに特有のことではない。「英国民(ブリテン人)は決して奴隷にならない」という「ルール・ブリタニア」の自由のスローガンは、イギリスの海外での覇権を歌ったものであった(リンダ・コリー、13頁)。シエス師は外来フランク人の末裔である貴族の支配からのゴール人の子孫であるフランス国民の解放を訴えたのであった。<sup>35</sup> そのように、「ドイツ人の歌」においても「統一」は「自由」と必然的に並べられた。しかし、両者の関係はどのようなのだろうか? 民族の統一は究極的な自由を獲得するための過程に過ぎないのか、それとも民族の統一こそが優先されるべき課題なのか。自由と統一の関係性の考察はライン・パトリオティズムが声高に唱導される中で方向性を失っていった。<sup>36</sup> ホフマンは「<sup>ラインリート</sup>ラインの歌・<sup>ラインライト</sup>ラインの苦しみ」という詩において、「どこの家にもあるオンボロピアノから愛する祖国ドイツに熱狂する歌が聞こえてくる」と上げ潮に乗ったライン詩人に侮蔑の言葉を浴びせている。ここにはライン運動に距離をとろうとするホフマンの姿勢が示されている。「立っても横になっても / 自由

なドイツのラインと聞こえてくる / 目が覚めるとまた聞こえる / 自由なドイツのラインと叫んでるんだ」(zit. bei Scholz, S. 176) ところが、出版元のカンペの思惑はホフマンとは別なところにあった。ヘルゴラント島で「ドイツ人の歌」の朗読を聞かされたカンペは売れると直感した。ラインの歌ブームに乗ろうとしたのである。ホフマンも、満更ではなかったことは、報酬として直ちに4ルイ金貨を要求したことからわかる。「政治詩人」としてのホフマンは出身地に「フォン」をつけて名乗ったことから分かるように中世の吟遊詩人の再来たらん野心も抱いていたであろう。作者自身の願望も含めて、「ドイツ人の歌」は何を期待されて受容され、歌い継がれていったのか、その先に国歌論争も生ずるのである。

「ドイツ人の歌」は1841年10月5日にホフマン&カンペ書店の所在地でもあるハンブルクで、ヴェルカーの歓迎式典においてハンブルク男声合唱団(Hamburger Liedertafel von 1823)によって公開初演された。<sup>37</sup> 公的祝祭はシンボルと神話を駆使して大衆を政治へ動員する主要手段であり、ドイツ各地に族生する市民協会や市民団体のネットワークが実施主体となった。男声合唱団は体操や射撃の協会とともに代表的な愛国的協会のタイプであった。18世紀には教会音楽が後退する一方、世紀後半になって民族の文化遺産としての民謡に新しい眼差しが注がれるようになったことが、合唱運動興隆の基礎をなした。そして、19世紀前半の愛国詩人たちが多くの歌詞を生み出し、シューマンやブラームスらのロマン派の作曲家も旋律を提供することで運動に加わった。だから、初演からしばらくは「ドイツ人の歌」はドイツ自由主義の市民運動と密接なかわりを持っていたのである。<sup>38</sup> だが、「ドイツ人の歌」の楽譜は必ずしも期待したようには売れなかった。三月革命後、ドイツ連邦内の各国は曲がりなりにも憲法と議会をそなえ、自由主義運動は議会内活動へ方針転換した。このような政治の沈静化とともに、「ドイツ人の歌」がハイドンのオーストリア皇帝讃歌の旋律と結びついて大ドイツ主義の立場を表明していることも不利に働いたであろう。

<sup>35</sup> シエス、『第三身分とは何か』、23頁以下。

<sup>36</sup> Vgl. Kämpfer, S. 116ff. 18世紀以来、「自由」は(ゲルマン人の土地としての)「祖国」と密接に結びつけられていたことは、Geishichtliche Grundbegriffeの項目“Freiheit”(S. 503ff)を参照せよ。オットー・ダンは、ライン・パトリオティズムにおいて政治的・社会的対立が統一を求めるナショナルなスローガンの陰に覆い隠されてしまったことを指摘している(『ドイツ国民』、78頁)。またかつてヤスパースは、民主主義的に思考すると、ドイツ国歌では統一と自由の順位が逆転していることを批判した。(Karl Jaspers, Nationalhymne, in: *Materialien*, S. 109f.)

<sup>37</sup> ヴェルカーを歓迎する市民はホテル前の小路を埋めつくし、群衆のたいまつ行列は大通りまで広がり、それはワートルローの戦いの勝利者ブリュッハー将軍が訪れて以来の熱狂ぶりであった。そういう中で、金管合奏団の伴奏つきで皇帝讃歌の旋律で「ドイツ人の歌」は歌われた。Mein Leben, S. 202. Vgl. Knopp/Kuhn, S. 34.

<sup>38</sup> 国民主義の協会運動は、モッセ、『大衆の国民化』、135頁以下。男声合唱団については、144頁以下。シューマンがベッカーの「ドイツのライン」に作曲していることなど、ベッカーの著しい人気については、Scholz, S. 162f. が言及している。



1871年のドイツ帝国の成立は国民的統一の完成としておおむね歓迎された。しかし、ドイツ社会に走る亀裂のゆえに「国家なき国民」に替わって「国民なき国家」が成立したことも事実であった。南は北に不信感を持ち、プロテスタントはカトリシズムを敵視し、社会主義者はインターナショナルであった。ドイツ帝国はもはや神聖ローマ帝国との歴史的なつながりを失い、ホーエンツォレルン君主への称賛が前面に押し出される。解放戦争以来の国民主義思想が人民主権的なものに起源があることは忘却されるか、歪曲して解釈された。<sup>39</sup>

新生ドイツ帝国には国歌が存在せず、プロイセンの皇帝讃歌が帝国を代表する国家の歌であった。「ドイツ人の歌」はブルシェンシャフトの学生歌集に収録されていたが、ほぼ作者不詳の作品となっていた（Vgl. Rohse, S.72）。しかも、ナショナリズムの民主的起源が忘却されていく一方で「すべてにまさるドイツ」で始まる第一連のみが人口に膾炙していった。ホフマン自身、帝国の成立を機に「すべてにまさるドイツ」の詩人として復権することを期待していたが、『非政治的歌謡』の作者の生前に名誉回復の機会は訪れなかった。<sup>40</sup>

解放戦争以来のオールドナショナリストが鬼籍に入ったヴィルヘルム時代になると「すべてにまさる」の詩句は、社会的亀裂を克服して国民的結集を図り、海外へ飛躍しようとする新政策と合致するものとなった。帝国国旗も定められた。こうして、1890年8月9日、ヘルゴラント島のドイツ帰属が定まった日、「ドイツ人の歌」はその誕生の地で初めて国家行事に際して歌われたのであった。<sup>41</sup> しかし、「国民歌謡（Nationallied）」を通して国民の間に精神の一致と共通心情が醸成されることを論じた、ハーメルンの文学研究者シュナイデヴィン（Max Schneidewin）は、三月前期の課題を背負っている「ドイツ人の歌」は「地球上の諸民族の中で支配的な地位」を求めるドイツにとってもはや時代遅れであると論じ

た。‘酒と歌’の代わりに‘血と鉄’が、‘正義と自由’の代わりに権力への意志が必要なのであり、感傷的な黒赤金の三色旗は黒白赤に取り換えるべきなのだと主張した（Schneidewin, S. 23ff. Vgl. Hermand, Zersungenes Erbe, S. 66f.）。それでも、20世紀の初めには、『ブロックハウス百科事典』は「国歌」の項目に、「今ではたいていの場合‘ドイツ、すべてにまさるドイツ’の歌が国歌に用いられている」と記すに至った。<sup>42</sup>

第一次世界大戦は「ドイツ人の歌」にとってドイツ国歌への道の突破口となった。大戦が始まって間もない1914年11月11日、ある戦時報告はフランドルでの戦況を伝えた。「ランゲマルク西方、少壮の部隊が‘ドイツ、すべてにまさるドイツ’の歌声とともに敵陣最前線に突出、これを確保した」。「勝利の皇帝を讃えよ」の旋律がイギリス国歌と同じだったので、霧の中の戦闘で敵味方を識別するために「ドイツ人の歌」を選んだのだという。冒頭の詩句は第一義的にはドイツ内の君主たちに向けられていたはずなのだが、ランゲマルクの伝説によって、「世界に冠たるドイツ」の要請が現実的となった。ドイツ国民はテキストと音楽に自らの存在を一体化させ、集団的熱狂はエスカレートしていった。<sup>43</sup> 第一次世界大戦のさなかであることから連合国も直ちに反応した。あるフランス語訳では原文の防衛的な表現が‘抗し、攻撃するために’（pour se defendre et attaquer）となったし、アメリカ合衆国では冒頭部分を“Deutschland, Deutschland, first of nations/ Over all in this wide world”と解釈した。<sup>44</sup> 国歌は、一般兵士としての個人が聖なる国土のために戦死し、国民のなかに溶解し、永遠の存在となることを称賛する。死と国民の結合の契機を欠いていた「ドイツ人の歌」は、戦後広まったランゲマルク伝説によってドイツ再生のための重要な構成要素となる（Mosse, National Anthems, p. 89ff.）。アドルフ・ヒトラーは世界大戦における若者の英雄的な自己犠牲と

<sup>39</sup> ドイツ帝国における国家表象の濫用と変質については、Hartwig, Bürgertum が詳しい。

<sup>40</sup> ホフマンは最晩年の詩において自分を‘ドイツ、すべてにまさるドイツ’の詩人と呼んでいる。「わたしはもう一度ドイツについて歌った/ただ喜びと希望をもって/だがわたしの‘すべてにまさるドイツ’は/嗚呼！反故となってしまった」(Knopp/Kuhn, S. 52f.) ゲルステンベルクは、‘すべてにまさる’の詩句に対する外国からの批判に応酬する意図をもって早くも19世紀末にホフマンを研究対象とした。しかし、当時禁書目録になっている詩人を取り上げることは研究者としてのキャリアを危険にさらすことでもあったと述懐している（Vgl. Hermand, Zersungenes Erbe, S. 66）。

<sup>41</sup> この事実も多く文献で紹介されている。例えば、Hattenhauer, S. 83

<sup>42</sup> Kurzke, S. 55 Anm. 5. その頃には、音楽の教科書でも定番の曲となっていたが、教育的配慮から‘ドイツの女たち’以下は、‘ドイツのしきたり、ドイツの誠、ドイツの勇気、ドイツの歌’と書き換えられた。「ラマルセイエーズ」がフランス国歌として定着したのも第3共和制下においてのことであった。国民国家としての内実が備わるには革命の国も一世紀を要したことは、記憶されてよいことである。

<sup>43</sup> Hattenhauer, Rohse, Sandmann など多くの文献が「ランゲマルク伝説」を論じている。Knopp/Kuhn は、ロイド・ジョージの反応を紹介している。

<sup>44</sup> Vgl. Hermand, Zersungenes Erbe, S. 67. Hermand, On the History of the „Deutschlandlied“, p. 251 では当該箇所現在の英訳は、‘Germany, Germany above all/ Above everything in the world’である。

歌との関係を生き生きと描いている。

(湿って冷たいフランドル地方の夜。夜中行軍。夜明けとともに挑発のために敵弾が撃ち込まれる) 死の最初の招待に対して二百ののどから最初の突撃の音が響いた。だが銃声は、さらにパチパチと響き、こだまし、うなり、ほえはじめた。(…) 突然かぶら畑と生垣を超えたところで戦争がはじまった。白兵戦だ。すると遠くの方から歌声がわれわれの耳に押し寄せてきた。だんだん近く、中隊から中隊へと流れてきて、まさに死がわれわれの隊列にとりついたとき歌もわれわれのところに達した。われわれは再び続けた。  
“Deutschland, Deutschland über alles, über alles in der Welt”<sup>45</sup>

新生ワイマール共和国は黒赤金の三色旗を国旗とすることによって1848年の革命精神に従うことを示していた。しかし、国歌は定まっていなかった。国民議会は右派のドイツ国家国民党から共和国を支える社会民主党と独立社会民主党まで、「ドイツ人の歌」は他民族に対する優越を歌ったものではなく、郷土への愛着を表現したものであるという立場をとった。1922年8月11日の憲法記念祝典においてエーベルト大統領は「ドイツ人の歌」第三連を事実上の国歌として認める発言をした。「ドイツ人の歌」は第一連をさけることによって公式に「ドイツの歌」となったのである。

統一と正義と自由！かの詩人の歌からとられたこの三標語はドイツ内部が四分五裂し圧政が布かれていた時代に全ドイツ人の憧れを表現したのです。それは私たちの困難な道をよりよい未来へと導いてくれるはずです。争いと専制に反対して歌われた彼の歌が党派闘争に乱用されてはなりません。(…) その歌はまた、ナショナリスティックな傲慢の表現に使われてもなりません。そうかつてあの詩人がそうであったように、今日私たちは「ドイツチュラント、ユーバーアレス何にもましてドイツ」を愛しています。彼のあこがれが成就され、黒赤金の旗のもと、統一と正義と自由を謳った歌が私たちの祖国感情の確固たる表現でありますように (*Materialien*, S. 56.)。

エーベルトはこの演説で慎重に「国歌」(“Nationalhymne”)という表現を避け、国際情勢に配慮してオーストリアを含む大ドイツ主義的な最初の二つの詩節を外していた。しかし、共和国に背を向けた左翼勢力の反発は強かった。かれらはむしろ国際的連帯のもとに「インターナショナル」を愛唱歌とした。他方、共和国に敵対する右翼勢力は「ドイツチュラント、ユーバーアレス世界に冠たるドイツ」をはじめから闘争歌として用いていた。第一連(国粋主義)と第三連(民主主義)の相克、共和国へのトータルな拒否を示す国歌の拒絶、または無関心という第二次世界大戦後のドイツが「ドイツの歌」に抱える問題はすでにワイマール期に存在したのである。右からも左からも愛されない共和国の国歌はやがて、第一次世界大戦開戦時の愛国主義すら否定する国民社会主義の国歌として採用されることになる。そこでは、ナチ党党歌ホルスト・ヴェッセル・リート(Horst-Wessel-Lied)と一体化された。

### Ⅲ. 1991年：第2の往復書簡

ドイツ帝国は国民国家建設の問題に「ドイツ人の歌」の意図とは異なる小ドイツ主義的解答を与えた。第三帝国は神聖ローマ帝国以来の伝統的な意味でも、近代国民国家という意味に照らしても帝国ライヒの枠組みを破壊してしまった。結果として、ドイツの地は分割されることになった。それは近代のドイツ国民史が零から再出発することを意味し、「ドイツの歌」には想定されていない事態であった。連邦共和国の政治指導者たちは、民主主義的価値への国民の支持を国家の存続基盤にするために、エーベルトにならって「ドイツの歌」第三連を国歌に選んだ。しかし、民主主義と傷ついた国民意識を結び合わせることは容易ではなかった。

「ドイツの歌」を国歌として承認した1952年の往復書簡において、ホイスは、ホフマンを「黒赤金の1848年世代」と呼び、祝賀行事の際にホフマンの歌が歌われるとともに黒赤金の国旗が「わが国のシンボルとして公式に認められた」ことの証として、官庁ばかりでなく、民間の建物にも掲揚されることを希望した(*Briefwechsel*, また、*Materialien*, S. 63.)。1959年ホイス大統領は、内務省の政令によって「ドイツの歌」の全三連が「解禁」されたという噂が流れていることに触れながら、1952年の往復書簡では「第三連のみを有効とすべき」ことで一致したことをアデナウアーに確認している。<sup>46</sup> 国家的

<sup>45</sup> zit. bei Rohse, S. 74. 次の邦訳から引用した。ヒトラー、『我が闘争』上、平野、将積訳、角川文庫、2003年改版、218頁

<sup>46</sup> ホイスからアデナウアー宛書簡、*Materialien*, S. 65. 「おそらく私に届いた噂は誤りなのでしょう。それならそれでよいのです。とはいえ、そのことについて閣下にお知らせすることを怠るわけにはまいりませんでした。」

決定から7年、アデナウアーの「国家行事に際しては第三連を歌うべき」という表現が、国家行事以外の場合には第一連、第二連を歌うことを許可しているという解釈の余地を残していたのである。1961年にも、当時のリュブケ（Heinrich Lübke, CDU）大統領は年頭あいさつで、国旗を掲揚し、「ドイツの歌」を歌うことにためらいがある現状を嘆かざるを得なかった（Sandmann, 636f.）。

学校はドイツの自由・民主主義的な伝統が教授される場となることが期待されていた。<sup>47</sup> 教材としての「ドイツの歌」もそのような文脈におかれた。ヘッセン州教育省の「ドイツの歌に関する命令」（1955年）は、「ドイツの歌」第三連はドイツ連邦共和国の国歌であること、学校は、しかるべき年齢にある児童は式典に際して国歌を欠陥なく正しく歌えるようになることを期待されていること、第三連に先立つ二連は、公的行事に際しては歌わないことが周知されるべきであること、歴史とドイツ語の授業においては、「ドイツの歌」を知り、歌の生まれた歴史的背景を明らかにしなければならないことを確認している。<sup>48</sup> このように政府は国旗・国歌によって連邦共和国へのアイデンティティを涵養しようとしたが、1950年代、西ドイツ国民の間には政治的無関心が広まっていた（Vgl. Fulbrook, Nation, state and political culture, p. 178f.）。1962年はじめに行われたドイツ国歌の始めの一節を問う世論調査では、46%が「世界に冠たるドイツ」と答え、「統一と正義と自由」という答えは32%、20%は答えられなかった。<sup>49</sup> ドイツ政府の意図とは異なり、「世界に冠たるドイツ」はドイツ国民の間に根を下ろしていた。同様に、ホフマンも「統一と正義と自由」の詩人とはみなされていなかった。<sup>50</sup>

「ドイツの歌」を国歌とすることによって国民統合をはかる立場には異なる二通りの立場がある。一つはドイツ

政府に同調する立場である。他方「ドイツの歌」を支持してきた保守勢力にとっては、ホフマンの詩全三連がドイツ国歌であるということは自明であり、議論の大前提であった。1964年、ホフマン・フォン・ファールスレーベン協会はその立場から疑問を公表し、国歌問題の法的不備を衝いた。「ドイツの歌」全曲はいつ歌うべきなのか、いつ第三番だけを歌うべきなのか、全曲を歌うことはできるのか、それとも歌ってもよいと許可されているのが第三番だけなのか、「国家的行事」の概念はどこで終わり、どこから自由な裁量が始まるのか。協会の解釈によれば、第三番を歌うべき国家行事とは、外国代表が公式に臨席する国家式典のみをさすのであって、普通の祭典や行事、集会はけして国家的な催しには当たらないというものであった。そして、祖国ドイツの統一と正義と自由はベルリンの壁の向こうでも達成されなければならない、祖国への愛と国歌への忠誠が満たされたときのみそれは達成される。ドイツ統一の偉大な闘士であったホフマンの詩の全三連がそう表現しているのである。だから、「ドイツの歌」の完全なテキストがドイツ国歌として次の世代に伝えられなければならない。それは国歌を歌わない、歌えない、あるいは無関心な西ドイツ国民へのアピールであった（Knopp/Kuhn, S. 121f.）。戦争の記憶はなお西ドイツ国民の精神を支配していた。西ドイツ国民はいつ国歌に対するコンプレックスを克服し、再び歌うようになるのか？

1960年代には、「集団健忘症」（フルブロック）にかかっていた西ドイツ国民の間にも過去の克服を追求する機運が兆してもいた。その動向はやがて60年代末から70年代にかけて既存価値への対抗的な政治文化の構築へとつながっていく。それだけに1970年代になると、過去の重荷を引きずった「ドイツの歌」はますます歌われなく

<sup>47</sup> グスタフ・ハイネマン（Gustav Heinemann, SPD）大統領は1970年の演説でドイツ・ジャコバン派に触れ、伝統は反動勢力にとつてのみの遺産ではないこと、1848年革命以前にも自由の思想を抱いていた男女がいたこと、そして「自由・民主のドイツが教科書の中まで歴史を書き改めるとき」が来た、と訴えた（Grab, S. 1）。

<sup>48</sup> Sandmann, S. 654f. 明らかにすべき歴史的背景とは、ドイツの歌はドイツの統一と民主主義を獲得する闘争の中で生まれたこと、ホフマンはドイツの自由の闘志であり、民主主義を擁護したために世間から追放されたこと、「マース川から…」の一節には帝国主義的な目標は示されておらず、当時のドイツ連邦の境界を示していたにすぎないこと、この歌がナショナリストで帝国主義的な意味で濫用されたのは詩人の責任ではないことなどである。当時同様の命令は、ノルトライン・ヴェストファーレン州、バイエルン州、西ベルリン、ラインラント・プファルツ州、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州、バーデン・ヴュルテンベルク州で出されていた（Sandmann, S. 655 Anm. 78）。

<sup>49</sup> Knopp/Kuhn, S. 119f. 1954年にサッカー・ワールドカップ・スイス大会で西ドイツが優勝した時には、ベルンのスタジアムでは2万人のサポーターたちから「すべてにまさるドイツ」の歌声が響き渡った。スイスの放送局はただちに中継を中断した。このエピソードは繰り返し紹介されている。Vgl. Hermand, S. 71; Knopp/Kuhn, S. 117.

<sup>50</sup> 「ドイツ人の歌」誕生125周年を祝う次のエピソードはそのことを雄弁に物語っている。「ドイツ人の歌」初演の際に詩人が滞在したハンプルクのホテルに銘板がはめ込まれた。「ドイツ、すべてにまさるドイツ」の歌は1841年に詩人ホフマン・フォン・ファールスレーベンがシュトライトホテルに滞在中にハンプルク体操協会とハンプルク男声合唱団1823によって初めて公開で歌われたものである」（National an der Alster, ZEIT Online vom 1966）。Vgl. Knopp/Kuhn, S. 122f. 公開初演については、上述 p. 89 参照。



なった。他方、東ドイツではドイツの地における「社会主義的国民」の存在が追求されるようになったため、「廃墟よりよみがえり」中の「ドイツ、一つのドイツ」は国家の方針と合わないものになってしまった。そのため、国歌にはハミングで唱和するようになった。結局、ともに歌われない国歌を有する二つのドイツ国家が併存することになったのである。むしろ、そのことは「ドイツの歌」が再統一ドイツの国歌に採用されるうえで有利に働くことになるだろう。

1977年、シェール (Walter Scheel, FDP) 大統領は、憲法記念日 (5月13日)、ドイツ統一の日 (6月17日、〔東ベルリン市民蜂起の日である〕)、反ヒトラー抵抗運動の日 (7月20日)、そして全国民追悼の日という重要な4日間には、テレビでドイツ国歌を放送することを提案した (Knopp/Kuhn, S. 125f.)。同大統領はさらに1979年、学校教育においてドイツ国歌第三連の教育に力を入れるよう全国文部大臣会議に要請し、各政党の幹部、各ラジオ・テレビ放送局の会長、自治体の上部団体、スポーツ団体、合唱団体にその施策を支援することを求めた。連邦共和国の民主体制を支持し、ドイツ分割という現状を受け入れないという政治的意思は国旗・国歌・勲章といったナショナル・シンボルによって形を与えられる。形なき自由はアナーキーである。形のないことが西ドイツ国家の形となりつつある危険が迫っている。国歌に親しむことは、国民が国家という共同体を体験するよい機会になる、とシェールは考えたのである (Ebd., S. 8.)。

他方では、1970年代には、ドイツ国歌は全三連で成り立っており、公式行事でなければ第一連を歌ってよいという見解が広まっていた。シェールの提案は、第一連のタブーを破ることをためらっていた右派勢力が攻勢に出てきたことに対する警戒心の現れでもあった。1978年、CDUの保守系の議員たちが「ドイツの歌」のレコードを選挙区の住民に配布し始めた。そのレコード・ジャケットには第三番の歌詞が太字で印刷されていたものの、レコードには全三連が録音されていた。また同年、バーデン・ヴュルテンベルク州の学校では歌手ハイ

ノ (Heino) が全三連を歌ったレコードが第4学年の児童たちに配布された。<sup>51</sup> さらに西ベルリンでは、市参事会議員の一人が自分の校区の基幹学校の第4学年の児童に「ドイツの歌」全曲を教えようとしたことに、SPD、FDP所属議員および教員会議が抗議し、教員組合は同議員を告訴するというスキャンダルが起きた (Ortmeyer, S. 90, Knopp/Kuhn, S. 126)。

1980年代のドイツ連邦共和国は、市民が選挙や市民運動を通して積極的に公的生活に参与する政治文化を確実にしていったように思われる。ナチズムの過去について活発な議論が展開され、反核平和運動と反原発運動、それに環境保護運動など市民の抗議運動を通して、エコロジー、フェミニズム、政治参加の思想は公式の政治文化となり教育にも定着していった。<sup>52</sup> その頃、社会学者のレプジウスは、ネイションの類型学を試みた論文の中で、ドイツ国民史においてはじめて連邦共和国が、「公民ネイション」を実現した、すなわち「民主的な市民的諸権利と、人民主権の原理に由来する自由な自決権を通してのみ国家の正当性が得られることになった」、一方、「民族ネイション」と「文化ネイション」の観念は補完的となり政治的には二次的となった、と論じた。<sup>53</sup> しかし、国歌は文化ネイションの問題であるがゆえに「ドイツの歌」の抱える負の記憶が改めて問われることにもなった。

1986年から88年にかけて、法律関係者の間でドイツ国歌としての「ドイツの歌」の法的妥当性をめぐる論争が起きた。<sup>54</sup> 1986年には、バーデン・ヴュルテンベルク州の基幹学校4年生が「ドイツの歌」全三連を暗唱させられ、歌わされていることについて、州議会では担当大臣のマイヤー・フォアフェルダー (Gerhard Mayer-Vorfelder, CDU) と社民党および緑の党の議員の間で激しい論戦が繰り広げられた。<sup>55</sup> 同年、ニュルンベルクで「ドイツの歌 86 (Deutschlandlied '86)」という諷刺詩が発表された。ドイツの巷にあふれる風俗や消費社会の象徴 (ドイツのコークにマック、ドイツマルク)、トルコ系ドイツ人、精子銀行などの話題がハイドンの旋律にの

<sup>51</sup> „...über alles“ -für alle?“, ZEIT ONLINE. Vgl. Knopp/Kuhn, Ortmeyer, Hermand など。

<sup>52</sup> 井関『戦後ドイツの抗議運動』、59頁以下。

<sup>53</sup> Lepsius, Nation, S. 25. レプジウスは、ネイションを、民族ネイション、文化ネイション、階級ネイション、公民ネイションに類型化している。

<sup>54</sup> Hattenhauer, S. 106. 1952年の往復書簡の法的性格への疑念、エーベルトに正当性を求める立場、慣習法上の承認等が論点となったが、この論争は一般の国民に届くことはなかった。

<sup>55</sup> この論戦に触発されてヴァルター・イエンスが書いたエッセーはつぎのように結ばれている。「1841年の『ドイツ人の歌』は、1986年現在、帰営ラッパのように賞味期限が切れているのではないか。ドイツ人には〔ブレヒト/アイスラーの『子どもの国歌』という〕誰も死んでいない、誰も殺していない…歌を戸棚の中に持っているのだから、あの歌はもう古くさいのだ」 (Jens, Vaterländischer Mißklang)。Vgl. Knopp/Kuhn, S. 14f.

せて歌われる。この詩を掲載した雑誌は国歌を冒とくしたものと押収され、ミュンヘンの州最高裁判所は作者を4か月の禁固刑の判決を下した。<sup>56</sup>

80年代は第二次石油危機による世界同時不況で始まり、外国人労働者の排斥運動が勢いをもつなどドイツ社会に深い亀裂がはしっていることが明らかになりつつあった。とりわけ、国籍に関する血統原理の維持はドイツ国民の法的定義に関する限り「公民ネーション」を目指すボン民主主義の限界を示すものとして批判的に論評されていた。<sup>57</sup> だが、1989年11月9日の突然のベルリンの壁崩壊が一挙に情勢を変えた。壁崩壊の日、西ドイツのほとんどの国会議員が緑の党の議員を除いて「統一と正義と自由」の歌を唱和したエピソードはよく知られている。

1990年10月、基本法第23条に従って東ドイツ5州が連邦に編入された。法律や通貨・経済の統一のほかに、統合を促すシンボルの採用も課題となった。これを好機として国歌の変更を求める動きもあったが、結局「ドイツの歌」が採用される。<sup>58</sup> 手続き上は、ヴァイツゼッカー(Richard von Weizsäcker, CDU) 大統領とコール(Helmut Kohl, CDU) 首相とのあいだで新たに書簡を交換する形がとられた。ヴァイツゼッカーは、ホイス-アデナウアー往復書簡以来、「ドイツ人の歌」第三連が「連邦共和国国歌として東西ドイツ分裂の時代において法治国家と、自由における統一への国民の心からの願望を表現してきた」こと、そして「新5州の同胞たちがこの目的を平和裡に達成した」ことを指摘する。その歌は国内外で歌われ、演奏され、ドイツ人として、ヨーロッパ人として、また国際社会「諸民族共同体」の一部として尊重すべき価値を表現する象徴として保持されている。これを踏まえ大統領は、ホフマン・フォン・ファールスレーベン作詞、ヨーゼフ・ハイドン作曲の「ドイツ人の歌」第三連を「ドイツ人民のための国歌である」と宣言する。コール首相の返書は、「自由な自決権のもとで統一に至るというドイツ人の意思こそが、(統一と正義と自由という) ドイツの歌第三連の中心的なメッセージである。それゆえ連邦政府の名においてかの歌がドイツ連邦共和国国歌であることに同意する」と結ばれている。

ヴァイツゼッカーは、この歌を東西ドイツの国民が一つになった「<sup>ダス・ドイツ・ツェ・フォルク</sup>ドイツ人民」の歌という意味を込めて、一般的になっていた「ドイツ(国)の歌」ではなく、ホフマンの原題通り「ドイツ人の歌(Lied der Deutschen)」と呼んだ。他方、コールの書簡では、新住民に対してはたすべき法治国家的な統一義務が強調される一方で、大統領の親書にあった国際社会の一員としてのドイツ国民の義務付けは欠如している。「人民の歌」か「国家の歌」か、それぞれ期待さるべき次元は異なっているものの、かつてのアデナウアー書簡が「国家行事では第三連を歌う」というだけにとどまったのに対して、新しい往復書簡は「ドイツの歌第三連はドイツ国歌である」と断言したことに意義がある。第一連、第二連は歌ってもよいが、少なくともそれは国歌を歌っているのではないことがはっきりした。<sup>59</sup> とはいえ、事柄がドイツの文化伝統にかかわる問題だけに、これで国歌論争に決着がついたわけではない。国歌問題は、移民の背景をもつ国民に言語を含むドイツ文化の尊重と修得を求める示導文化問題といったより大きな政治・文化的文脈で取り上げる必要があろう。<sup>60</sup>

## その後：2006年夏の夜の夢

サッカーの国際試合前の国歌演奏はドイツ国民が共和国と国歌に感情的な絆を表明する数少ない機会の一つである。1970年代、フランツ・ベッケンバウアー(Franz Beckenbauer) 主将はチームメートに国歌演奏のセレモニーに合わせて「ドイツの歌」第三連を唱和するように求めた。このエピソードは、西ドイツ国民と「ドイツの歌」との間に正常な政治的関係が成立するようになった兆候としてポジティブに評価されている(Jeismann, S. 664)。

時は移って2006年、ドイツ・ワールドカップの予選ラウンド「ドイツ対ポーランド」においてスタジアムの若者から自然発生的に「統一と正義と自由」の大合唱が沸き起こった。再統一後の世代に「<sup>パトリオティズム</sup>新しい祖国愛」が誕生した時として国民もメディアも驚愕した。大会期間中、民家には黒赤金の三色旗が掲げられ、外国からのサポー

<sup>56</sup> Vgl. Zeichner, S. 150f. 1990年に憲法裁判所は原判決を破棄した。その判決文は、*Materialien*, S. 66ff. に収められている。

<sup>57</sup> ネーションの定義の問題は、フランスのネーション定義との比較を参照軸としてドイツ再統一とEU発足後にさらに活発に論じられた。その後、ドイツは国籍法を改正するのだが、その経緯についてはここでは論ずることはできない。ブルーベーカーの著書は独仏の国籍とネーション比較の先駆的研究、安保論文は独仏の国籍法改正をふまえてブルーベーカーの議論に批判的検討を加えている。梶田の新書も出生地主義と血統主義による国民の定義の相違を論じていた。

<sup>58</sup> 東ドイツの最後の首相デメジュールは、統一交渉において、「統一と正義と自由と…」に続く第二番として東ドイツ国歌の第一番を加えることを提案したが、拒否された(Vgl. *Auferstanden zu Einigkeit, Recht und Freiheit*)。

<sup>59</sup> Bekanntmachung. コールとヴァイツゼッカーの国歌の呼び方の違いについては、Zeichner, S. 13f. も言及している。

<sup>60</sup> Leitkultur には、ワグナーのライトモチーフを「示導動機」と呼ぶという意味で、「示導文化」の訳語を当てたい。

ターを快く迎え、スタジアムばかりでなく街のパブリックビューイングの会場でも「統一と正義と自由」が鳴り渡った。慎重かつ不器用に愛国主義と国旗・国歌に接してきたドイツ国民が、あからさまに祖国愛を示したその熱狂の6月は「夏の夜の夢」と呼ばれた。『南ドイツ新聞』は、「<sup>パンツァー</sup>甲羅から蝶になるとき〔パンツァーには戦車の意がある〕」という見出しを付けた(Als aus Panzern Schmetterlinge wurden)。そのドイツ国民の変貌ぶりは欧米のメディアによって広く伝えられたが、ドイツサッカーのスタイルの変化も世界中を驚かせた。規律と気概を前面に出した武骨なスタイルからボールの保持力を高めダイレクトパスを多用する現代サッカーに変貌していたのである。その変化を担ったのは主に移民家系に育った二世、三世の若い選手たちだった。彼らの活躍は、国籍法の改正によって血統共同体としての国民概念から決別した新しいドイツの象徴でもあるはずだった。ところが、2012年のヨーロッパ選手権大会の準決勝で敗退すると、元ドイツサッカー協会会長マイヤー・フォアフェルダー(上述、p. 93)はレーフ(Joachim Löw)監督に代表選手に国歌を歌うことを義務付け、国歌を歌わない移民出自の選手をナショナルチームから排除するように求めたのである。

戦後ドイツが築いた中道左よりの政治文化に価値を置いてきた人々は、ドイツ国歌をめぐる最近の動向にナショナリズムの再来という危険な兆候を感じ取っている。2006年には、教員組合はオルトマイヤーの著書の抜粋を小冊子として発行し、プレヒトの「子どもの国歌」こそ新しいドイツにふさわしい国歌であると主張した。しかし、従来の左右の対立からは説明できない根源的な変化が起きつつあることを窺わせるのは、メルケル政権の難民政策に反対する右派勢力が「ドイツのための選択(Alternative für Deutschland)」を名乗っていることである。既存の価値に対する別な選択肢を主張することは、元来、左翼になじみの文化であった。抗議の文化がドイツの政治文化に根づいた今、極右勢力が左翼の語彙に習熟したことには目の眩むような当惑を覚える。SNSの発達で人のコンタクトがグローバル化したせいでドイツ国民のメンタリティーは陽気になった。しかし、グローバル化とヨーロッパ政治が国民の不満と不安の原因となり、左右を包摂する政治文化の存続が脅かされているとするなら、国歌斉唱も看過できない政治課題なのである。

## 引用文献：

アンダーソン、ベネディクト『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』白石さや、白石隆訳、

NTT出版、1997年  
 安裕裕美子「国籍法改正に関する仏独比較—移民流入によるネーション理解のゆらぎをめぐって—」(1)(2)『横浜国際社会科学研究所』第20巻第3号(2015年9月)39-50頁、第20巻第4, 5, 6号(2016年1月)29-46頁  
 井関正久『戦後ドイツの抗議運動 「成熟した市民社会」への模索』、岩波書店、2016年  
 梶田孝道『新しい民族問題 EC統合とエスニシティ』、中央公論社、1993年  
 柄谷行人『〈戦前〉の思考』、講談社学術文庫、2001年[1994年]  
 木村佐千子「ドイツ語圏の国歌について」『獨協大学ドイツ学研究』第53号(2005)、1-37頁  
 木庭宏『民族主義との闘い ハインリヒ・ハイネ《ドイツ・冬物語》研究』松籟社、1987年  
 「国歌への批判深まるドイツ」『朝日新聞』1994年10月21日付朝刊  
 コリー、リンダ『イギリス国民の誕生』川北稔監訳、名古屋大学出版会、2000年  
 阪井葉子「ホフマン＝フォン＝ファラーズレーベンと民謡」『待兼山論争』第39号文学篇(2005)、1-16頁  
 シイエス『第三身分とは何か』、稲本洋之助ほか訳、岩波文庫、2011年  
 シャーデ、E『ルートヴィヒ・エルクと近代ドイツ民謡学の展開』、坂西八郎訳、エイジ出版、1979年(第2版)  
 高橋秀寿「ドイツ『国民』の歴史的変遷と現在—ミリューと『想像の共同体』」『立命館言語文化研究』第6号(1995年)、83-102頁  
 ダン、オットー『ドイツ国民とナショナリズム 1770-1990』末川清、姫岡とし子、高橋秀寿訳、名古屋大学出版会、1999年(Dann, Otto, *Nation und Nationalismus in Deutschland 1770-1990*, München 1993. 邦訳は、96年の第3版による)  
 テイラー、A・J・P『近代ドイツの辿った道 ルターからヒトラーまで』、井口省吾訳、名古屋大学出版会、1992年(Taylor, A.J.P., *The Course of German History. A Survey of the Development of German History since 1815*, London 1961 [1945])  
 トゥホルスキー、クルト/ハートフィールド、ジョン『ドイツ 世界に冠たるドイツ 《黄金の》20年代・ワイマール文化の鏡像』野村彰訳、平井正解説、ありな書房、1982年(*Deutschland, Deutschland über alles. Ein Bilderbuch von Kurt Tucholsky und viele Fotografien. Montiert von John Heartfield*,



- Reinbeck bei Hamburg 1980 [zuerst: Berlin 1929])  
 トーマス、ハインツ『中世の「ドイツ」 カール大帝からルターまで』、三佐川亮宏、山田欣吾訳、創文社、2005 年  
 ニーチェ、フリードリッヒ『善悪の彼岸 道徳の系譜』、信太正三訳、ちくま学芸文庫、1993 年  
 ニーチェ『偶像の黄昏 反キリスト者』、原佑訳、ちくま学芸文庫、1994 年  
 ニッバーダイ、トーマス「独自性を求めて—ロマン主義的ナショナリズム」同『ドイツ史を考える』坂井榮八郎訳、山川出版社 2008 年、66 - 97 頁 (Nipperdey, Thomas, Auf der Suche nach der Identität: Romantischer Nationalismus, in: Ders., *Nachdenken über die deutsche Geschichte. Essays*, München 2. Aufl. 1991, S. 132-150)  
 ブルーベイカー、ロジャース『フランスとドイツの国籍とネーション 国籍形成の比較歴史社会学』、佐藤成基、佐々木てる訳、明石書店、2005 年 [原著 1992]  
 『マルクス・エンゲルス選集第 6 巻 革命と反革命』、林健太郎ほか訳、新潮社、1956 年  
 モッセ、ゲオルゲ・L『大衆の国民化 ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』、佐藤卓己、佐藤八寿子訳、柏書房、1994 年  
 Alter, Peter, Nationalism and German politics after 1945, in: Breuilly (ed.) , *The State of Germany*, pp. 154-176  
 Angst vor der Nation. Patriotismus, *ZEIT ONLINE* vom 19. Juni 2006  
 Antrag der Abgeordneten Dr. Ott und Genossen von 29. September 1949  
 Auferstanden zu Einigkeit, Recht und Freiheit. Geschichte der deutschen Nationalhymne, *Deutschlandradio Kultur – Länderreport* vom 06.07. 2015. ([http://www.deutschlandradiokultur.de/geschichte-der-deutschen-nationalhymne-auferstanden-zu.1001.de.html?dram:article\\_id=324641](http://www.deutschlandradiokultur.de/geschichte-der-deutschen-nationalhymne-auferstanden-zu.1001.de.html?dram:article_id=324641))  
 Als aus Panzern Schmetterlinge wurden. Der Fußball hat die Deutschen 2006 zu fröhlichen Patrioten gemacht. Nun wird sehr viel infrage gestellt, *Süddeutsche Zeitung* vom 3. März 2016  
 Behr, Hans-Joachim/ Blume, Herbert/ Rohse, Eberhard (Hgs.) , *August Heinrich Hoffmann von Fallersleben 1798-1998. Festschrift zum 200. Geburtstag*, Bielefeld 1999  
*Bekanntmachung der Briefe des Bundespräsidenten vom 19. August 1991 und des Bundeskanzlers vom 23. August 1991 über die Bestimmung der 3. Strophe des Liedes der Deutschen zur Nationalhymne der Bundesrepublik Deutschland*, Bundesministerium der Justiz und für Verbraucherschutz  
 Breuilly, John (ed.) , *The State of Germany. The national idea in the making, unmaking and remaking of a modern nation-state*, London, New York 1992  
*Briefwechsel zur Nationalhymne von 1952*, Abdruck aus dem Bulletin der Bundesregierung, Nr. 51 vom 6. Mai 1952  
 Dann, Otto (Hg.) , *Nationalismus und sozialer Wandel*, Hamburg 1978  
 Das Deutschlandlied, in: *Bulletin des Presse- und des Informationsamtes der Bundesrepublik Deutschland*, Nr. 51 vom 6. Mai 1952, S. 537, auch in : *Materialien*, S. 64f.  
 “Die blödsinnigste Parole der Welt“. Deutsche Nationalhymne, *Spiegel Online* vom 24. Juni 2006  
 Freiheit, in: *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*, hrsg. von Otto Brunner [u.a.], Stuttgart 1972-1997, Bd. 2, S. 425ff.  
 Friedlaender, Ernst, Das Vakuum, *ZEIT ONLINE* vom 17. Juli 1947  
 Friedlaender, Ernst, Nationalismus, *ZEIT ONLINE* vom 6. Februar 1947  
 Fulbrook, Nation, state and political culture in divided Germany, 1945-90, in: Breuilly (ed.) , *The State of Germany*, pp.177-200  
 Gerstenberg, Heinrich, *Deutschland, Deutschland über Alles! Ein Lebensbild des Dichters Hoffmann von Fallersleben*, München 1916  
 Grab, Walter (Hg.) , *Leben und Werke norddeutscher Jakobiner*, Stuttgart 1973.  
 Häberle, Peter, *Nationalhymne als kulturelle Identitätselemente des Verfassungsstaates*, Berlin 2013, 2. Aufl.  
 Hartwig, Wolfgang, Bürgertum, Staatssymbolik und Staatsbewußtsein im Deutschen Kaiserreich 1871-1914, in: Ders., *Nationalismus und Bürgerkultur in Deutschland 1500-1914*, Göttingen 1994, S. 191-218  
 Hattenhauer, Hans, *Deutsche Nationalsymbole. Geschichte und Bedeutung*, München 4. Aufl. 2006

- Hermant, Jost (Hg.) , *Der deutsche Vormärz. Texte und Dokumente*, Stuttgart 1967
- Hermant, Jost, On the History of the „Deutschlandlied“, in: Applegate, Celia/ Potter, Pamela (eds.) , *Music & German National Identity*, pp. 251-268
- Hermant, Jost, Zersungenes Erbe. Zur Geschichte des *Deutschlandliedes*, In: Ders., *Sieben Arten an Deutschland zu leiden*, Königstein 1979, S.62-74
- Hoffmann von Fallersleben, August Heinrich, *Mein Leben*, hrsg. von Augusta Weldler-Steinberg, Berlin u.a. o.J.
- James, Harold, *A German Identity 1770-1990*, London 1989
- Jeismann, Michael, Die Nationalhymne, in: François, Etienne/ Schulze, Hagen, *Deutsche Erinnerungsorte III*, München 2009 [2001], S. 660-664
- Jens, Walter, Vaterländischer Mißklang, *ZEIT ONLINE* vom 19. November 1986
- Kämpfer, Heidrun, Schlagwort, Begriff, Leitkonzept. Hoffmann von Fallersleben als politischer Dichter, in: Behr u.a. (Hgs.), *August Heinrich Hoffmann von Fallersleben*, S. 101-119.
- Knopp, Guido/Kuhn, Ekkehard, *Das Lied der Deutschen. Schicksal einer Hymne*, Berlin, Frankfurt/M, 2. Aufl. 1990
- Kurzke, Hermann, *Hymnen und Lieder der Deutschen*, Mainz 1990
- Lepsius, M. Rainer, Nation und Nationalismus in Deutschland, in: Winkler, Heinrich August (Hg.) , *Nationalismus in der Welt von heute*, Göttingen 1982, S.12-27
- Materialien zur Geschichte der deutschen Nationalhymne. Arbeitsbuch zum Schulfernsehen*, hrsg. von Landesbildstelle Berlin, Lothar Wolf u.a., Berlin 1990
- Mit eurem Blut werdet ihr unseren Boden tränken, *Spiegel Online*, Nr. 20 vom 14. Mai 1952
- Mosse, Gero L., National Anthems: The Nation Militant, in: Grimm, Reinhold / Hermant, Jost. (eds.) , *From Ode to Anthem: Problems of Lyric Poetry*, Madison 1989, pp. 86-99
- National an der Alster. Vor 125 Jahren wurde das Deutschlandlied zum erstenmal gesungen, *ZEIT ONLINE* vom 1966
- Ortmeyer, Benjamin, *Argumente gegen das Deutschlandlied. Geschichte und Gegenwart eines Lobliedes auf die deutsche Nation*, Köln 1991
- Rohse, Eberhard, „Das Lied der Deutschen“ in seiner politischen, literarischen und literaturwissenschaftlichen Rezeption, in: Behr u.a., *August Heinrich Hoffmann von Fallersleben*, S. 51-100
- Sandmann, Fritz, Das Deutschlandlied und Nationalismus, in: *Geschichte und Wissenschaft in Unterricht*, Jg. 13 (1962) , S. 636-656,
- Schneidewin, Max, *In Sachen des Nationalliedes*, Hameln, Leipzig 1899
- Scholz, Jachim J., Deutschland in der Lyrik des Vormärz, in: Gössmann, Wilhelm/Roth, Klaus-Heinrich (Hgg.) , *Poetisierung-Politisierung. Deutschlandbilder in der Literatur bis 1848*, Paderborn 1994, S. 161-197
- Staub, *Spiegel Online* vom 27. April 1950 (Nr.17)
- „...über alles“-für alle?“, *ZEIT ONLINE* vom 28. September 1978
- Web 上の文献の利用について  
引用文献中に挙げた *Der Spiegel* と *Die Zeit* の記事は、主に Web 上に公開されているものを利用した。  
ニーチェの著作は、Nietzsche Source (<http://www.nietzschesource.org>) の *Digitale Kritische Gesamtausgabe*, based on the critical text by G. Malli and M. Montinari, Berlin, New York 1967, ed, by Paolo D'Iorio を利用した。
- [補1] 「ドイツ人の歌」  
ドイツ、すべてにまさるドイツ、  
世界のすべてにまさるドイツ、  
守りを固く  
つねに兄弟のように一つにまとまるならば、  
マース川からメーメル川まで、  
エッチュ川からベルト海峡まで—  
ドイツ、すべてにまさるドイツ、  
世界のすべてにまさるドイツよ！  
  
ドイツの女たち、ドイツの誠、  
ドイツの酒にドイツの歌は  
この世界に  
昔ながらのよき評判を保ちつづけ、  
生涯にわたって  
われらを気高い行いに駆り立てるだろう—  
ドイツの女たち、ドイツの誠、  
ドイツの酒にドイツの歌よ！

統一と正義と自由を  
祖国ドイツのために！  
そこに向かってわれらは皆  
兄弟のように心と行いをもてめざそうではない  
か！  
統一と正義と自由は  
幸せの礎—  
栄えよ、この幸せの輝きのなかで、  
栄えよ、祖国ドイツよ！

[補2] ホフマン・フォン・ファラスレーベンの生涯

アウグスト・ハインリヒ・ホフマン (August Heinrich Hoffmann) は1798年4月2日、ハノーファー選帝侯国に属するファラスレーベン (現在は、ヴォルフスブルク市の一部) で生まれた。父は宿屋を経営する商人であり、市長も務めた。少年時代、ホフマンの故郷はたえずフランス革命に端を発する変動に巻き込まれていた。1816年、神学を修めるためにゲッティンゲン大学に入学したものの、次第にギリシア・ローマの古典学へ関心に移した (「第二のヴィンケルマンになるつもりだった」)。在学中にカッセルにグリム兄弟を訪問、ヤーコプ・グリム (Jacob Grimm) の勧めでゲルマニスティックに転ずることを決意した。1819年、プロイセン政府によって新設されたばかりのボン大学へ転学し、ドイツ文献学の研究を本格化させる。同時期にハイネもボン大学に在学していたはずだが、ともにシュレーゲル (August Wilhelm Schlegel) の講義に失望したことを書き残している。ホフマンは図書館司書補の職をえ、独学で文献学の研究をすすめた。古文書や民謡収集のために近隣の町や村を訪れ、ライン地方の美しい自然と文物に親しんだ。1821年はじめて古都ケルンを訪れ、ヴァルラフ (Ferdinand Franz Wallraf) の美術収集に驚愕した。この年オランダ、ベルギー (まだ独立していない) まで足をのばし、大学を修了しないまま、兄をたよってベルリンに赴いた。研究をかねて各地を歴訪することは生涯彼の習性となった。

ベルリンではモイゼバッハ (Karl Hartwig Gregor von Meusebach) 男爵の知遇をえ、ルター関係の書籍、賛美歌、歌謡などの近世ドイツ文学の豊かな蔵書を利用することを許された。モイゼバッハの仲介でシュレーゲン地方のブレスラウの中央図書館の館員 (Kustos) の地位を得る。さらに、プロイセンの文部大臣アルテンシュタイン (Karl von Stein zum Altenstein) の後援をえて、1830年図書館員の地位のままブレスラウ大学員外教授、1835年同大学のドイツ語およびドイツ文学の正教授になった。一連の大学人事は必ずしも教授団の賛意をえて

いたわけではなく、ホフマンは同僚との間に始終トラブルを抱えることになった。

学生時代からの放浪癖はやむことなく、文書館巡りを通してドイツ・ヨーロッパ各地の市民文化人と交流し、ドイツの政治状況への批判を強めていった。1840年、41年に『非政治的な歌謡 (Unpolitische Lieder)』 (全2巻) を公刊、諷刺や皮肉に論争的な内容をこめた詩はドイツ語文化圏の読者に広まった。ヘルゴラント島で「ドイツの歌」を作ったのは、1841年8月であった。しかし、文部大臣がアイヒホルン (Friedrich Eichorn) に交代していたプロイセン文部省はホフマンの歌の政治的影響をおそれ、1841年12月、ホフマンの詩集の発行元であるホフマン・ウント・カンペ書店の全出版物をプロイセンで発禁処分とした。ホフマンに対する処分も提起され、1843年初めに年金なしで罷免されることが通知された。お尋ね者となったホフマンは知己をたよってドイツ各地を転々と放浪生活を送っていたが、メクレンブルクの隠れ家で1848年の革命を迎えた。しかし、革命には積極的には関与せず、1848年10月、政治から退いたホフマンのもとにベルリンから恩赦の知らせが届いた。休職補償金375ターラを得たものの、教授の地位は回復しなかった。何はともあれ定収を得たホフマンは1849年10月28日、姪のイーダと近親結婚し、ライン川流域に居を移した。

ワイマール大公カール・アレクサンダーは、自国を再びゲーテ時代のような文芸の中心地にしようと計画した。ホフマンは招きに応じて1854年にワイマールに移住し、ベッティナ・フォン・アルニム (Bettina von Arnim) やフランツ・リスト (Franz Liszt) の斡旋でワイマールでの文化事業に携わった。1860年、ヴィクトル・フォン・ラティボア公 (Victor I. Herzog von Ratibor) が所有するヴェーザー河畔ヘクスター (Höxter) 近郊のコルヴァイ (Corvey) 城に入り、城に付属する図書館の管理運営にあたり、生涯をこの地で終えた。

民謡収集、ゲルマニスティックの研究、童謡の収集と創作、および浩瀚な自伝の執筆が後半生の主な仕事となった。1871年のドイツ帝国の成立は彼に再び世に出る希望を与えたが、それも果たすことなく、1874年1月19日に亡くなった。ホフマンの研究者としての業績は現在ではほとんど知られていないが、日本で「霞か雲か」 (Alle Vögel sind schon da)、「かつこう」 (Kuckuck, Kuckuck, ruft's aus dem Wald) で知られている童謡は彼のものである。